



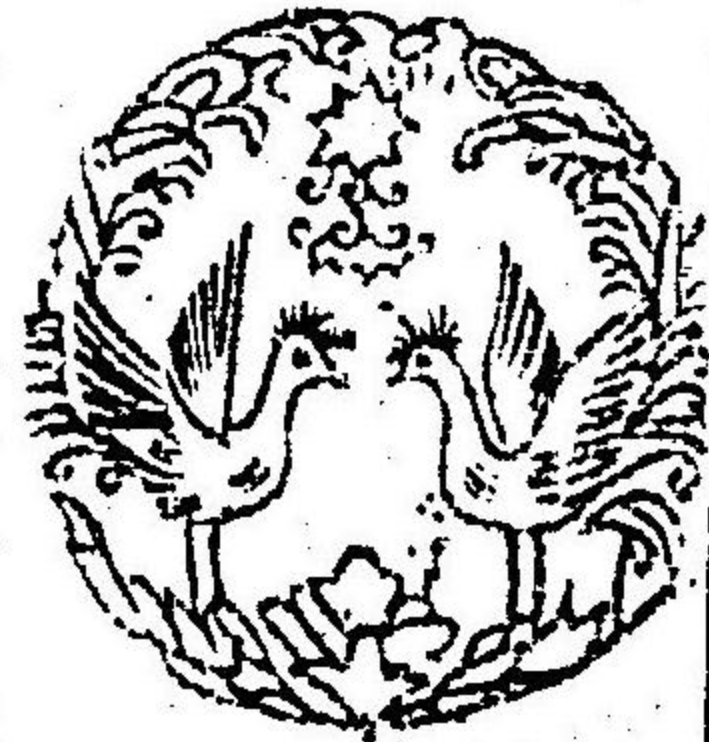
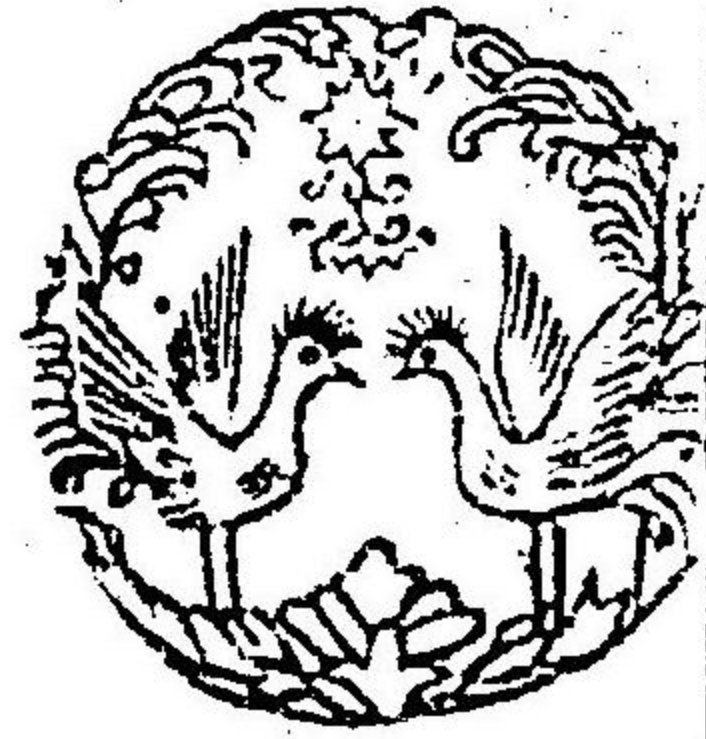
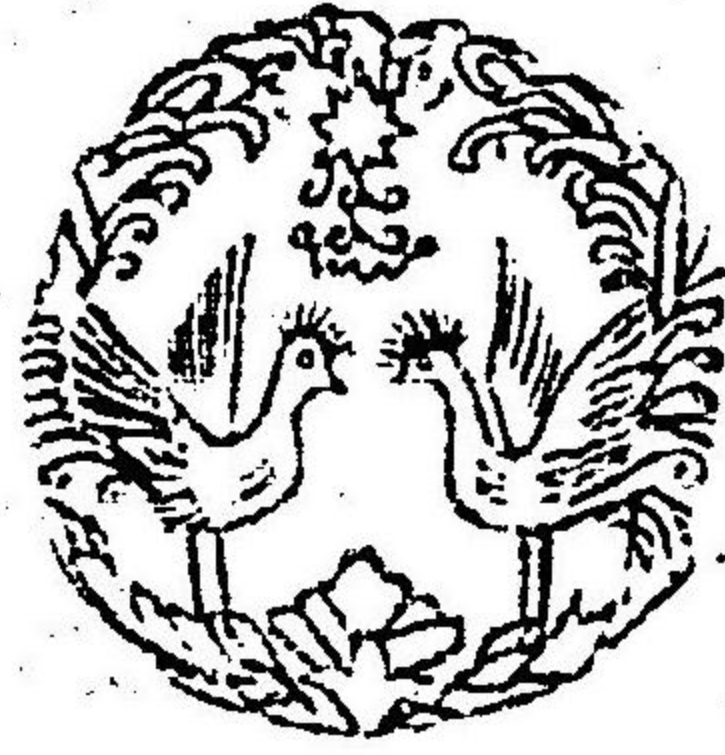
912.4

i238k8

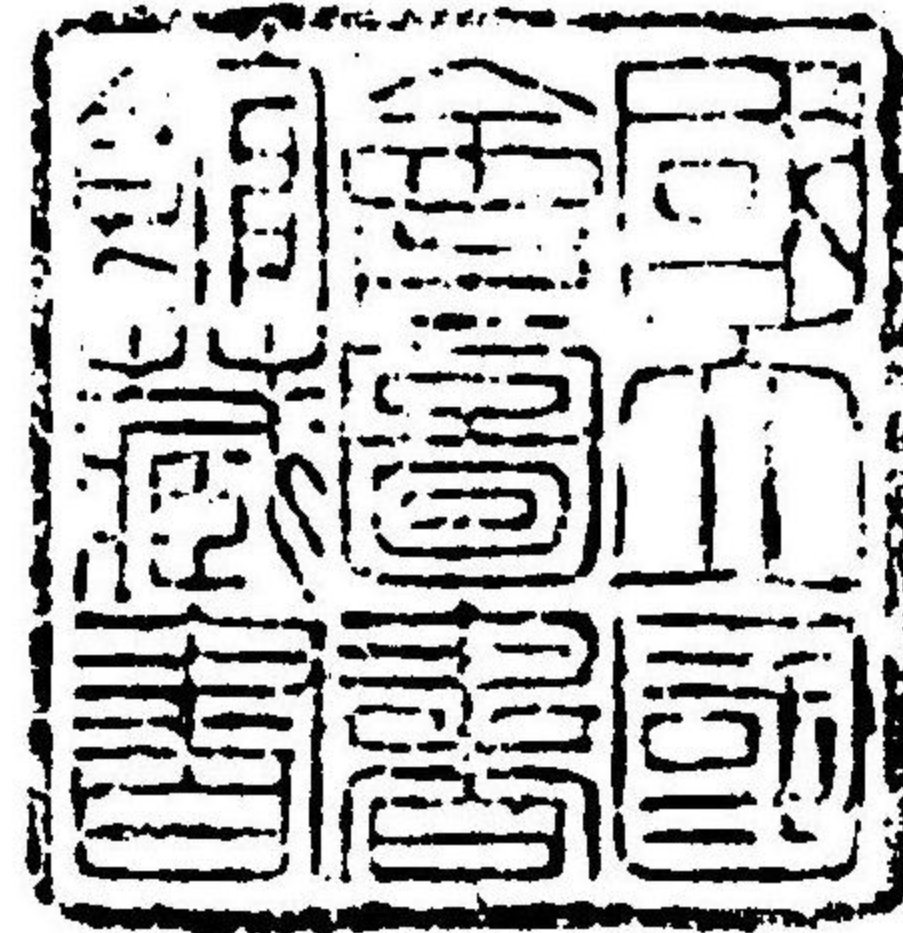
戲曲
叢書

12

傾城酒香童子



91.74 T: 238 k8



近松門左衛門作

享保三年十月廿五日初發行

傾城酒呑童子

全



柳亭種彦翁淨瑠璃本目錄曰。是より先に見へたる酒呑童子枕
言葉寛永四年の三段目四段目五段目の口迄と書直し茨木屋
と云ふ遊女屋の者りと極め御咎めあひし事と綴り入れし
ものなり。初段より二段目の末までは枕言葉の如し近頃印行
せし「おこたり車」といへる隨筆に「金の冠若ぬばりしや
くは持病ありとるや」と書しは近松が名文なりとほめしは
此淨瑠璃のことなり



337103

逸話 (本編三十九頁巻末看)

註

傾城酒吞童子も娼樓の主人茨木屋幸齋が奢ま極
めて四討せられたりし事を作りたるものあり。巢木林子が執
筆の生に竹田出雲穂積以母負あり。巢木林子も幸
齋角が驕奢者を状して「金の冠着あはかりし」といふ
に至り夜已にあげたれをて帰りしに三人同じ蚊
厨に臥して語るやう
（珍貴）扱々門左が例の妙文敬馬きたり係し金冠
着あはかりしとて町人の事跡にも狂言綺語よから
すししきに過たり。羽立書直させ候し
（出題）以母負子の言ひ「万てつかまけやけき詞あり定
めて門左の筒あるや」とし
羽立巢木林子未しし書日続きぬ。藤も持病に有りとかやて
二人相顧て撫然たるもの之を久ふせりといふ



傾城酒吞童子

近松門左衛門作

古子保三身十月十五日物興行作。近松門左衛門作。
一度見れば千々の思ひさびし。一度見るに一つの憐い事深しと。張文成か仙女に契りし詞
。日々に衣寛び朝なくに帯弛ふ。悲みの腸す々に断とん文成か仙女に別れし恨。天上下
界酒戀慕の園と出す。況や心と種として和哥に和ぐ日本の。色香に染る梅櫻花山の御門と
申こそ。風流なる御本性尊貴なる御容貌。潘安仁が母方の甥ふべらんめれ。女御後
宮許多ふらふ其中に。大納言爲光が娘恒子の姫。一朝に選ばれ弘徽殿と御局にて。比翼
連理の御語ひ三千の寵愛只獨り。六宮の粉黛も色と失ふ日影草。其妬草身に生て。遂に病
の床の内短き夢と消給ふ。御門不覺の御歎を朝政し玉はず。雲の上何と無く思々しげなり
ければ。月卿雲客切てはと弘徽殿の御姿。繪に寫して奉る形有りしに似たれども。物云
ず笑はず中々思ひの種とて。晝は夜の寢殿に御涙と友とし。夜の南殿の月に御心と傷ま
しめ歎かせ玉ふと悼はしき。折節御門は秋の戸の。御階に悄々下させ玉ひ。人や有る人や
有ると召るれど。宿直の公卿も程遠く御應申人も無つし所に。常陸介平の安盛瀬口に侍ひ

傾城酒吞童子

しが。安盛と勅答して御庭に馳く。近ふくと間近く召れ。汝の武士の身なれども桓武天皇の御葉末。雲井と出て遠のらす物の情は知るべきぞや。弘徽殿に露程も像似たる女有らば。尋出して我思ひ晴せよのしと斗にて又御涙に暮玉ふ。安盛謹んで承はり。さん候中納言高房が娘三の君は。顔容心ばへ迄弘徽殿に見替と斗似たる由。御所中の取沙汰殿聞にも達し参らそべし。此頃承はれば鳥飼の少將彼三の君と戀慕ひ。源の頼光が郎等渡邊の綱と媒人に頼み。近々に婚禮取結ふとは申せども。普天の下王土に住で。勅詔と申さんに誰の違背仕らん。安盛不肖の身なれども御文一ツ賜はつて。彼姫に與へ父母に申聞せなば。今宵の中に伴ひ参り弘徽殿の御忘草。宸襟と安め奉らんと忍びやかに奏すれば。主上仰せ有けるは。いざとよ三の君が弘徽殿に似たるとは。兼て我も聞しるを渡邊の綱が媒人にて。鳥飼の少將に面見るとな。然れば主有る女ぞかし。降位の後は例も有れ在位の身にて正無き事。上一人の善悪の下萬民の鑑ぞや。後代の謗も恥し、此世の戀さへ叶はぬと。況て冥土の人戀しき思ひの何なる思ぞと。十善天子の御身にも。世と憂しとの御迷戀路の習ひわりなさよ。安盛重ねて宣旨恐れ入り候へ共。去乍ら一夜も夫の家に入。夫婦枕と並べてこ

そ主有る女とは申べけれ。未契約斗にて親の家と出さる女。何條事の候べき殊に媒人渡邊の綱。羅城門の鬼神と切し謹みとて。物忌に籠り朋輩の對面も仕らぬと承はる。然れば祝言の日限も伸々と覺へ候。是屈竟の折柄仕畢せて参らせんと。勤めさせば主上もしるべ嬉敷戀の山。ふみ通ふべき楷梯せよと宸筆も細々と。艶書遊ばし此度の恩賞は。望次第と宣旨有る安盛鳥飼子と地に付。只今源家繁昌にて滿仲より頼光迄。鎮守府の將軍に任せられ平家は有れども無きが如し。此御使仕畢せば頼光が將軍職と。某親望仕らん最早夜も更みひなんす。宿所へ歸らず是より直に参らんと。御文玉はり上書見れば上々迎も痴話文の。別に異らすと参る身々と斗漸墨に。御筆立のうづ高き御文体迄嘸々と。思ひなし地の御文箱詩繪に照し桐菊の。朕が思ひは深けれと人は情も朝霜に。置文とはすなど傳へよと常事殿に入り玉へば。主殿司の宿直守彦格子参る。扱も渡邊の綱は。假染の人の詞の争ひに羅城門に行き向ひ。茨木童子が腕切取り。三七日の物忌に門戸と閉て謹みし武勇の程こそゆゝしけれ。獨武者保昌は綱が徒々尋んと。舍人馬添只二人肌に腹巻ささらさや。空も臆の月毛の駒門前に手綱搔くり。平井の保昌お見廻やす物もふとぞ呼はりける。門と固めし

堤の彌物をらるしきと飛で下り。地に鼻と付て御出の由申入るべく候へ共。主人綱事羅城門にて鬼神の片腕切取り。三七日の物忌に籠り候へば。門外にて拙者承はり帳に記し。一門他門共に對面仕らず。然るに一昨日渡邊の伯母。久敷遇ざる懐しさ床しい戀しいなにとて。七十に餘る身が襟々歎き恨みし。變化の業とは思ひも寄す。恩愛捨難く門を開き對面せしに。忽ち惡鬼と顯はれ腕と盗んで天井より。あれ御覽候へあの如く。破風と蹴破り黒雲に入て失候。綱は是と無念に存じ切腹の御暇申す。一期の浮沈と籠居の節帳に留置させ後程申聞とべし。近頃無禮千萬と懇懇にぞ述にける。保昌破風とさつと見上。ム、ウ聞しに違ひ無つしな。去乍ら鬼の腕と取返され。夫が無念な口惜しい切腹せふといふ様な。不覺人の渡邊に逢ふて何の用も無し。左様の男子と知ずして馬の足費して。見舞に來たる保昌迄不覺者と人や見ん。門に立も汚らはしと駒引返し。歸らんとする所に待々保昌用が有ると。聲と掛て渡邊堀の上に突立上り。珍らしい保昌。御邊と某御前にての争ひ故。其夜羅城門にて鬼神の腕と切たる事定て音にも聞つらん。三七日の物忌過ば。鬼の腕と御邊が面へ投付んと思ひしに。口惜や腹立や化生の業は力無く。聞々と奪取られ渡邊程の武

士が。鬼神退治の證據と失ひ表裏者の名と取らん。弓箭の恥辱詮方無し人間業にて此無念。晴さん事叶ひ難し某も腹切て。共に變化の鬼神と成り二度腕と取返し。御分が眼にさらすとべきぞ能所へよふ來た。渡邊の綱が腹切とよつく見置て頼光へ。御物語仕れ今生の對面是限り。生と替て茨木が腕取返し逢ふべきぞ。必々其時に變化と思ふて恥驚すな。昔の誼に取て噛もといふまいと。飽迄に廣言し既に刃に手と掛れば。保昌大聲上て阿々と笑ひ。やれ腹筋や腹の皮。鬼の肘と切たるが何程の高名ぞ。夫と手柄と思ふ故又奪れしも恥辱と思ふ。淺間しや可愛やな。此保昌杯は。切たし手柄と思はねば奪はれても恥ならず。變化鬼神と鎮むるは禰宜山伏行法の。出家の加持の珠數先にて禱伏するも珍しうらす。弓矢取る身の高名は。鬼より怖い朝敵大敵と亡し。生捕分捕響と子孫に殘るところ手柄とは云ふべけれ。是しきに腹切ふ香と切ふと云ふ様な。馬鹿侍の切腹と見て居る様な目は持ぬと。引返し駈出る太刀の鎧と渡邊堀越に確と取り。左は云せぬ保昌。左程侮る渡邊と見廻に來たは心得ず。笑はん爲の賞めん爲の聞では得こそ返すまじ。留れどころは引たりけれ。獨武者保昌が。歸ると云ふと天津風雲の通ひ路吹閉て。天地と動の勢にも留らば留て

見よやとて。鯉口鏝に握添へ籠ふんばり乗据たり。汝は聞ふる哥人にて大内にての花盗人。華奢風流の口吟辨舌の聞たり共。鬼神と取控ぐ渡邊との力づく。此慮外と夕開の羅城門にて我兜の、まつ斯こそ引たれとしゃくつて引ば。保昌の振放さんともちり引、とまれ留れの呻聲叶はじものと怒る聲。磯の松風岩打波。兩頭の大蛇が丈山の山の腰、さりとくど巻めて頭と並べ引き合ふも。是れには何で遠ふべき兵庫鎖の白銀作り。筋金煙金鑄の金かへり栗形うらがはら。中何なる名作の干將莫耶とさんめれ。鞘と一ッになひませの繩に爲さんと左へ捻。巻れじものと右へ捻ぢ。ゑいやくゝの力聲太刀の帯取寛ぎて。飾の金具揺出、鏗爾々々々と鳴音は。諸漏已盡の大阿羅漢神通力と試さんと。須彌山と動のす時色界に風起り。四王叨利の大伽藍百億の寶銀。那由佗の羅網八萬恒砂の瑠璃華鬘雲井に散て鳴渡り。響き渡るものくやらん此の世に響んものは無し。保昌の古兵太刀損じては悪ありなんと。するりと抜て帯取とふつと切て切放し。馬乗放しすつくと立ば綱は鞘と持ながら。塀の上へ突立つて眼合ふたる面魂。阿叫の二王に異ならず。裏まじかりける勢なり。龍虎と挑む其中にだん模様染被衣。供の女が頬冠り御所のひんぬき。二人が

中へ臆氣も無くしやんと分入るおひ風や。茨の枝に初花の一輪咲たる如くなり。兩人怒つて誰の有る。此女引摺退と睨付れば。被衣押退何と渡邊久しいの。其方の音に聞く保昌の。我こそ中納言高房が娘三の君。是渡邊其方の武士か侍の。鬼の肘の切やらふが侍の。思われぬ。鳥飼の少將殿と自か祝言の。跡の廿八日とい媒人した其方の極め覺が有ふ。三日も三日も手前より萬事取持肝入の媒人の役ならずや。今日で十日に余れ共何の便宜音信無く。父上は腹と立使と越ても門と閉取次者も無いと有る。世間の娘に問て見や。十六七に成てのら嫁入と急ぐの急がぬの。急ぬ娘が有たらば二ッとも無い首掛。少將様も若い殿。駈出る馬と留る様にお心も急ふし。我も思ひの溜水身も湧出る池水に。人目堤の切口いかな留ても押へても。思ひ流すに流されず返答聞んと仰ける。渡邊も至極に詰り御尤千萬なり。去乍ら東寺羅城門の變化と討ち。三七日の物忌に引籠り出仕とさへ仕らず。殊に常陸の介安盛と源平武勇と勵む時節。不覺の批判受候へば源家の油断と身と謹み。御祝言の御挨拶日限迄も延引。追付首尾なし申べし聊の如才は無しと。云ひも敢ねに、置やく。如才無しとは云われまい。自の弘徽殿の女御さまに似たとやらん殿聞にて。未だ祝

言せぬ内に大内へ召れんとて。平の安盛お使只今館へ来る也。我も乳人一人連れ漸くと逃出たり。今宵の中に嫁入せねば明日の内裏へ召さるゝ筈。其夜美に頼光の官職と削り。安盛と鎮守府の將軍になさるゝ由。我々思ひ叶ぬのみ源氏のひけといふものよ。斯る大事の有りとも知らず。朋輩喧嘩の保昌も保昌。是れ如才で有るまいや油断では有るまいや。如才ない〜と口で斗つ子供も云ふ。さんさ如才のこぢらぬ多。歌にも謠ふ聞やらぬかど。恥しめ怨み玉ひける。保昌横手と打て何と渡邊。姫君の御咄し正八幡の御託宣。遅なはる所で無し思案は無いらと云ひければ。思案といふて姫君と鳥飼殿の御館へ。入れ申より外無し御分と我との言争ひ。根も葉もない内證事お手前頼む。少將殿へ参つて表向の御儀式の追ての沙汰。今宵密に渡邊が家来とつけ。此方より姫君を送り参せんと申して呉たら。満足せんと云ひければ。此上臈と内裏へ上安盛めに威と付ては。我君の御恥辱何れも我身に掛つた事。然らば我の駈付ん被衣なぞ云ふ物の御所めいて人目に立つ。びらり帽子の綿帽子町風に出立せ。一足も早く送られ先奥へ入れ申せ。渡邊が伯母が又来たとも。毛の生た鬼の腕姫君に一本も。無しと答へと蹴ふれてあとり打立打寄

る。岸の漣波玉走る。誰の堀江で水高き。矢と射る如き川の瀬と。戻橋とは付ぬらん。川岸に積たる材木の中に薪はまじれども。火の氣無ければ暗き夜に。思ふ殿御に逢ひに行く姿を女子一生の繕ひもなく三の君。花紫と戴いてびらりしやらの町風も。帽子にもるゝ衣の香の。娘は同じ娘にて御所こそ色のつらさなれ。綱が郎等八十の吉平次。後に續て見へ隠れ姫君の御供し。女の足の急ぎ共十町餘と行惱む。道ばう行ず一條の戻橋に行掛る。先にのさばる懐手肩で切る風馬鹿くさ。身の程知らぬ高聲も辰巳上りに皺粘て。高い山のら谷底見ればお萬のはひやな布晒す。な布さらさ。お上臈をこへ。夜道とささるは戀じやの〜。戀人は誰の知らぬが。此鼻がちよつと相しやうのいと。繕付は、うるさど。密と過ば又紛れ。しんぞ其風堪らぬと抱付は引。ばづし。取付所と吉平次腕取て匆退け。是眼潰れ。此女中は悉くも汝等が小銭で買ふ様な賣物で無い。はでてんがうのはらすと通れ〜と言ければ。わりや此女中の附物の。盲目め身と鉢坊主と思ふる通れとは通るまいが何とする。何とする仕掛れば。吉平次も大事の供堪へて見れ共耐られず。是で通して見せんすと。拳と固め自身の間割てのけとてうを打ち。己に打れて居やうのと松の木腕

と振廻す。手首と取て振放せば。突掛り捻合掴合ふ所へ。綱が弟三田の源八吉平次斗は氣遣はしと。御跡慕ひ來りしが。遙に見付ゆらりと立寄りて。相手の肩背引搦んで引退。是若い人此方と見れば女中同道。お主が仕勝て手柄にもならぬと。殊に少こちらは酒氣も有るそうな。参り掛つて男がわつらふ。堪忍してお通りやれ。いばりめ。軀自慢に入らしい扱とは本の男の出入。わいらが知るこのちやないと打て掛る。小肘むすど搦んで得手物。是はいな。腕車にどうと投たりけり。橋詰に積たる割木の木影より。馬屋の物五いすの割木退取延。源八が真向欺し打二ツになれとはつしと打。打れてひるます物五と取て差上。こりやくくく割木の中へ投込で。吉平次。怪我がある連まして脇へ寄れくと云ふ所へ。爰彼所の割木の蔭より。十人斗むらくと手々に割木引下げく追取廻す。ハ、知れたく。扱のうぬらは平の安盛が郎等共。町人の行掛りに紛らし。姫君と奪はん爲の喧嘩の仕掛と。見たく三田の源八渡邊の綱が弟。己等では相手に足らぬ安盛の何所に有る姫君の御供なれば。随分出と殺して太刀刀の抜放さぬ。己等に振舞ふ物が此方に有る。やぐら持出し肩すかし負投掛投腹楯と。尻引のらげしと踏み朱に染たる前髪に赤熊の如く

打亂れ。大手と廣げ。勝負いさごされと喚さしのみ雷電の如くなり。能推量平の安盛三の君と置いていけと打掛る。敵は八方我身の獨おなじく割木追取て。てつへいそつはう肩骨胸骨頭の鉢。割木限り腕限り打合く投合し。風に揉る、古家にこけらの散るがごとくなり。源八獅子の鬨みとなせども笠に掛つて打掛れば。もう切らねば成ぬとどるりと抜て馬や物五が胸骨くつと。指通せばうんと斗に死たりけり。すは切たのと呼はる聲吉平次堪られず躍出で。真先に進んだる矢島の傳平が片腕動と切落し。逃足したる大勢と二人が中に追取込め。太刀と割木の金芝木火花と散し切立る。此勢に堪へずして。北へ走り南へ飛聲もたのき。橋も高さ闇と分てぞ逃失せけり。渡邊の綱平井の保昌息と切て馳付。我々兩人少將殿御館へ参りし所。姫君御入なしと有る心元無さ。是迄迎ひに來つたり。廣綱の手と負ふたな。云甲斐無し卑怯千萬。盜賊の業の口論の語れ聞くと睨付る。卑怯とは情ない。平の安盛三の君と奪はんとの催し。様子は緩く申べし夫吉平次姫君と兄貴へ渡せ。保昌殿御苦勞と一禮そこく。姫君も怖いやら悲しいやら。一期の愛目見たぞいの。其方衆に逢ふたれば胸の踊も静まつた。早う館へ連れていて少將様に逢はせてや。太抵撫てもらは

すば。お腹の痞の下まいと云ふも笑ふも憚なれや。お道理〜いさ此方へといふ雲の。俄
 ろに天地震動し。綱保昌が姿は其儘鬼神と成り。姫君と掻抱き飛去んとする所と。南無三
 寶と吉平次打物抜て切拂へば。廣綱も一世の大事統も忘れて打掛る雲霧に。眼眩み腕弱り
 切ても突ても水と切風と切か如くにて。踏もためず欄杆にうんと云ふて反返れば。鬼神は
 姫と引摺み悪風吹掛け炎と降し。虚空にぞつと笑ふ聲。雲に残りて失にける。雷鳴騒ぎに
 綱保昌。あはやと驚き駈付見れば。廣綱は朱に染吉平次ものた打て三の君は在さず。漸二
 人と呼助け事の標子と尋れども。變化の所爲は力に及ず。無念〜と斗にて言舌正しゝら
 ざりけり。扱こそと下人と添二人と木蔭へ介抱させ。綱は怒つて切齒し。口惜や保昌、
 必証是は羅城門の。執心残つて我に恨となしよな。未塵に碎いて捨んすと。天と睨み大
 地と踏み身と揉み猛り廻れ共。翼無ければ虚空も飛れず。怒れる眼に怒りの涙。嶺に夕日
 に夕立の雨と涙ぐが如くなり。斯る所に平の安盛平家の一族五百餘騎。橋の兩岸退取巻さ
 やあ〜夫なるは渡邊の綱。誼旨なるぞ承はれ。高房の娘三の君帝より召さるゝ所。遮つて
 是と押へ刺へ失ふ段。朝家と輕しめ奉る罪科に依て。擲取て參らせよとの繪言。違背に於

ての首討て隠せとの御事なり。恥と思はゞ腹と切れと弓杖突てぞ呼はりける。綱の榮爾と
 打笑ひ。やれ〜嬉しや相手はしう思ひしに。平家の大将安盛とや夫こそ綱が口なめすり
 變化より先己れと。雨り出れば保昌やれまで渡邊。平家にもせよ敵にもせよ宣旨と有れ
 ば勅使なり。上へ對する朝敵と云はれての一大事。先隱便に引取て負て勝思案もぞ。静ま
 れと制それどもいや〜聞のぬと駈出る。安盛は勝に乗り。縛れ括れと下知となす三方論
 議の真中へ。坂田の公時例の大木刀前下りに差はらし。のつさ〜と歩來る安盛はつと色
 違ひ。肩身とすぼめ軍兵の中に屈んで隠れけり。公時は橋板も踏抜斗り立はたより。たつ
 た今迄此所に平の安盛が見へたが。掻消を様に失たるは是も變化の業なるの。變化と切は
 綱があるもの。又人間のふう〜と捨り殺すは此公時が好物。何處へうせたと睨廻し。まそこ
 にある。是爰へござんせ盛様。夫は譯が悪いぞ多怖いことは無いわいな。ござんせなわど小
 手招き鬼の痴話のと氣味悪し。安盛こわ〜乍ら。左いふは坂田の公時な。我の天子の御
 使下郎の傍は穢はし。云ふ事あらばそれから申せ。云れぬところへ出しやばつて。傍枝よ
 遇ん不便やと震ひ〜も口減す。公時堪らず荒出て前なる軍兵引摺み。取ての投げ〜安盛

と中に引立引摺出し。欄干に動と打付、虚言吐め。綱が討手の勅諭とはどの王様の勅諭じや。日本の王様の仰で無いは。たつた今頼光。禁中で聞れた大欺騙のもがりめ。此公時の闇魔王の勅諭にて。己等が討手に向ふた地獄で手間の入らぬ様に。粉に碎いて遣べしと元首押へて胴骨と。ゑいやうんと踏付くさいなめば。痛や苦しや。許してたも公時偽りとい云乍ら。帝懸幕の御歎き諫めん爲の忠節。隠堀の愛にお文も有る。去とては過つた許してくれど泣ければ。保昌渡邊縫付假にも天子の御使。勅書と懐中せし者に足と當るは後日の越度。誤るからは許してやれど。漸々にもぎ放し。歸れと引立る命拾ふて安盛は。足早に立退しが立歸つて大音上。宸筆の勅書と持たる人には三公だにも下馬する作法。頼光が郎黨共勅筆の御文と。土足に掛て踏だる事只今直に奏聞す。詞とつがふたわらがふなと言捨て、引返そ。公時其懸引裂んと飛で掛ると綱保昌。落中變化の騒動に取交て事やのまし。先静まれと制すれども公時はたつた今。夜食と喰ふた食となし變化も鬼神も悪人も。ひとこにしまふと断出る止れ止まれ。放せ。放せ止まれ取々の鳥の入聲や鐘の聲。夜ははのくどめのねさす。公時が顔朝日の色に。連れて御所へを上りける。

第二

雲井の月も山腹の軒端に暈る御住居。松の柴垣竹の簷戸。錦の櫺引替て。菊穂の庵の草庭主殿司の菖蒲草吹ねを軒に生茂り。主水司の初氷佛の阿伽と碎のれて。曉の廊夜の鹿何れ哀の種ならぬ。西の一、間御佛殿。弘徽殿の繪像と掛け。中守の釋迦半爾佛佛も我も十九才。夫の衆生濟度の道。是の懸路の闇に入。猶三界と出やらず。佛の心穢しど唯見玉はん恥しど。懺悔に絞る花衣苦の袂と袴にけり。参り仕ふる者迎の中納言義兼。左中辨維成ならで下部の一人も置れねば。二人水汲み朝菜摘み。名聞離れし御遣世戀故どこを哀れなれ。義兼維成御前に出。内々平の安盛申上し高房が召仕右近と申腰元。三の君に似たる由則ち高房猶子と成。御徒然と戀ん爲。安盛今宵御座室へ密に伴ひ申さん由申越候。若き女の男の中。女の逆も候いでは初々敷も頑固にて。却て不興と存すれば。京の御所より女孺のおすゑか一兩人。呼候はんと申上れば。いやとよ王位と振棄内裏と出て世と連れ。左様の音信都の勝世にうるさし。右近とやらんが伴ひには。此山科の里人士民の妻子殿の女にて。密に語ひ何方へも洩ぬ様にと宣へば。誰とがな雇んと二人談合取々の。折にありた

く柴附馬。あの山越て此山殿が。八瀬や小原木黒木東木。柴召されどを賣にける。維成見
 附てなふ義兼。彼の御所へ柴入るおぼろの清水のお嫁で無い。何と今宵彼者と頼むま
 の。是の幸ひ柴買はん柴買はふと呼入れば。あいと答へて内に入不思議そふに顔と眺め。
 是のく見た様なと思ふたが。京の御所でさいく見たお公家様違じやはにや。誠に聞は
 上さま内裏とお出なされて。お位の宮様へ参つたと申が爰に隠れて御座ります。何ぞ
 うらぬ王様の宮殿樓閣打捨て。我等が住居同前に御内の衆も無さるよな。是の先何した聞
 れお借銭がな有つてゐる。御不自由と推量しておいとし様や勿体なや。親祖父代々おさ
 よ所へ柴入れた冥加の爲。薪木の嫁の續けませふ。なんばお位高ふても借銭に勝れぬ。
 はんの位倒れじやと涙と流とぞ殊勝なる。義兼維成打笑ひ否々左様の事での無し。あれに
 御座なさるゝこと今迄の帝様。御髪切せ玉ふ故花山の法皇と申奉る。其方が心ざし敬感な
 りと有ければ。有難やと手と合せ其敬感どの私が眞。九十六の錢百で一昨年死なれ。戒
 名の清耀永久と。語れば君も堪兼てきつと笑はせ玉ひけり。兩人重て今宵君の御慰めに女
 中一人参らるゝ。御祝言のまなびしたければとも我々の男勝手知らず。待上臈も何もうも萬

事其方と頼むとあれば。つがも無い。内裏様の嫁入とは御所車の御入内。一度拜んだば
 つるり作法の夢にも知ぬはにや。否々左様の儀式で無し。此御住居のとなれば祝ふてきつ
 と形斗。其方達が嫁入と同前に入用の物調へて。御挨拶も申てくれ平にくと頼まれば
 。夫ならば安い事八瀬や大原の嫁入り。大体祭同前酒のもろみの手作り。高野河の鮎の鮎
 ひがますのひしり物。孝と萱藪表めて三種の肴が入ます。落付いお雑煮餅の大方一人前。
 三升當に搗たれば大概にいき渡る。多なればさつぱりと洗濯夜着も入れれ。暑い時分の
 是が徳青柴一把燻べれば。蚊屋吊すの新枕園の内其身の氣轉。我等が若い時分の秘密口
 傳も入たれ共。山家の奥の奥迄も今の娘の獨ばみ。五日歸りとする迄の朝晩の御膳。お汁に
 は何なりと屋障の附た焼物。尤飯の上置無しの生飯なりと云ければ。扱も白馴す開馴ぬ佐
 たる暇が物語り。聞も山家の珍らしさと敬感限り無りけり。はや安祥寺の入相の音羽の露
 に夕づく日。傾く笠の女姿平の安盛同道にて。御庵室に伺公し。兼々奏せし中納言高房が
 養子。右近の前御宮仕と奏れば。義兼維成出向ひ能ぞく此方へど。笠と取せ引續ひ。
 玉座に近附け安盛も同じく御前に伴はる。安盛轉る所無く。三の君の身の果餘り本意無く。

切ての由縁と此女と御宮仕へに奉る。殿廬にも叶ひなば。御恩賞には鎮守府の將軍職偏に願ひ奉る。是右近の前。日比怖や恐ろしやと怖恐れたる夢物語。御咄し申上弘徽殿に負まじと。随分お氣に入玉へ後程御機嫌伺はんと。御前と退出し旅宿へこそ歸りけれ。右近は幼き時よりも公家奉公に馴たれ共。王位に与され身も震はれ顔に紅葉の秋津君。共に御心恥かしく御詞もあらざれば。義兼維成氣の毒がりも爰らが男の困物。お嫁とて御挨拶萬事は頼ふだ任せたぞ。我々の花山寺の和尚の方へはづすと。表へ出れば、夫々跡の我が請取た。先の閨のお盃酒買ふて来ませふ。斯な時に兎角酒。酒の情の露重徳利下て出にけり。右近の猶も差俯き。君も何と打付に云掛玉はん詞も無く。盃にの嘸踊りつらん。踊が好な顔付じや。京と違ふて踊りも無き。此山里の寂さの住愛のらんとの玉へば。舌々お物静なお住居。お殊勝な佛様。私のはが好此方ない釋迦様。あの繪像の佛は何ぞ申佛やら。悟氣深い徒そふな佛様じやと云ければ。彼こそ朕が涙の種。弘徽殿が儂よ。位も身とも捨てたれと契りの思ひ捨られず。廻向と爲してくれよとて御涙にぞ暮玉ふ。右近も哀と催せしが、忘れたり。安盛の言教へ爰の事ぞと思ひ出し。弘徽殿の御影の。なふ

恐ろしや凄じや夢幻しに見たとは違ひ。貌ばせい美しく魂の蛇身。見るも怖やと逃まどふ法皇驚き。這の何事ぞ仔細と申せとの玉へば。去ばこそ此間或時の夢に見へ。又幻しに顯はれ弘徽殿が怨靈なり。汝君へ召るゝ等妬まし、腹立や。三の君と取殺しあら嬉しやと思ひしに。已が執と並べんとや思ひも寄す叶ふまじ。君に近付女あらば取殺しく。日本國の女の種精野と爲して絶さんと。鬼ども蛇ども譬無く追廻さるゝ其苦しき。身につまるれておいとしや。三の君の御最期迄思へばお主の敵ぞと。安盛が教の通り違ひなく、語りける。法皇誠と思召大きに驚き逆鱗あり。存生にての妬無く賢女貞女と作りなし。臨終にも異女に思ひ忘れて懺めど。能もく偽りし。戀も思ひも醒果たり釋迦牟爾佛も聞玉へ。三世の契り是迄世々永劫の勘當ぞと。繪像と取て投玉ひ。是に付ても三の君が最期の心不便やな。形見には右近の前。閨へ來れと打蕪れ入御成こそ是非無けれ。右近繪像と取上佛壇に掛置て。去迎の情なやお爲に成と有し故。教の通りの申せしが死たる人に無き名と負せ。我詞一ッにて縁と切らせ勅勘有る。恨と許し玉へとて涙と流し詫けるが。不思議や繪像動き出身の毛もぞつと忽ちに。地絹と離れ形と顯じ右近とやらん借に聞け。生身の

冤罪も愛のらずや科無き屍に勅勘受け。冤罪に殊春の中絶し思ひ知れや逆。懐に
 飛入と思へばうんと魂切て。我ならなくに我心弘微殿と入替り。愛の右近のたればなの昔
 の契りの忘れじもの。彼驪山宮長生殿の陸言も。君と我中にあらく。あらのねの七重の鎖
 の切る、共。縁の切らじと手と伸し。引けば引る、御切替。亂れ引れてよろくく。よ
 るばひ柳氣力無く風に揉る、御有様。天に引立地に引据。君が心の飛鳥川我の三途の波枕
 朽る世迄の朽せじと。三界六道附廻る足弱車くるくく。苦み玉ふを哀なる。大原のお嫁
 の斯とも知らず。酒と求めて歸りしが法皇右近の亂髪。摺合玉ふ体こりや何ぞ早夫婦争ひ
 ろ。今あらそんな身持で此愛世帯の持れまい。王様も王様じや。内裏の格が爰へは向ぬ向
 隣の聞へも有。男は裸体百官の上に立ば女御様。今で申さばおの様ぞや。夫婦云争ひ世帯
 の毒。こゝとまじやと云ければ。兎角右近の狂氣ぞや。能斗らへとの仰にて奥へ入んとし
 玉へば。何所へくと玉体と引廻し引伏て。なふ狂氣とは世に有る人。我の形も夏草の。
 陸に焦る、螢火の。聲と立ねば夫を共いはに堪る、岩間水。ニツに颯と打破て。波に碎か
 ば碎けよとさめくと泣ければ。是おの様。何じや破ての碎らへとの。ニツにも三ツにも鍋釜

の此方の。破ても私の持はぬが。世帯の毒とは其所のと。摺木一本箸片し只の出来ぬ銭が
 いる。但しおの王様の細工に見事遊ばす。醫夫でも勿体ない。王様の摺木の握らりやせ
 まいと叫きける。いや愚なり懸路に王位迎も隔無し。現世の位の未來の仇。心に思ひ身
 に忍び口に戀しと焦るゝも。身口意業の三業の其三業と知らずやと。進付はなふ悲しや。
 三ごうとは粉練の事の。粉練三合持たらば入舞すなどの男の事。是の女の一念の。其玉體
 遺纏はりて遺掛り。遺れがたなや遺さじと。寄りては離れ離れての。又引寄する懸蓮の綱
 苦しくと夕闇の。さら恐しく眼の女も。惱み伏ば玉体も勞れ轉ばせ玉ひしと。猶も離れ
 ぬ恨の涙凄じかりける次第なり。義兼維成此音に何事やらんと断附て。抱き起し參らせ是
 はくと斗にて。驚き騒ぐ其所へ頼光の代官として渡邊の綱。阿部の晴明誘引し一散に驅
 來り。今夜晴明天文と勘へ候へば。下位の帝死靈の惱ます天變有りと奏聞し。攝政兼家公
 の仰によつて。則晴明召具し候。頼光の禁裡守護に候也。渡邊と以て言上と細々と演に
 ける。法皇御感斜ならず。疾々加持し申せとの院宣。晴明右近に近附六甲六丁の秘文と誦
 へ。天津のな木天つ菅麻と。千座の沖戸にときたらはして。拂ひ申請め申せば忽地震ひ口

走り我こそ弘徽殿の亡魂よ。君に怨り無けれ其平の安盛。將軍職と望ん爲右近に殺て冤罪と云掛。三の君の命も我取たると奏せしり。跡片も無き偽り三の君の丹波の國。大江山酒香童子と云ふ鬼神の所爲。疑ひ晴れて勅勘許し契りと違へ玉ふな。去ばくと云ふ聲に靈化の失て覺ければ。女御の姿有くと元の繪像に移りけり。右近夢の心地にて安盛が詞の工み言上すれば。死靈の告一言一句違ひ無し。皆安盛が悪逆と逆鱗殊に甚しく。今宵當所に宿する由搜し出して擲取り。頼光が心に任せ尋らふべしとの。院宣も畢ぬに平の安盛參上し。右近の前の敷座に叶ひ候り。伺ひの爲參りしと云せも果す渡邊。院宣成ぞと胸板とるつばと踏付。乗掛り繩と掛れば通らぬに。忠節勵む安盛と擲めよとの院宣り。心得難しと立上るいや科の云ふに及ず。已が心に覺有り。云譯あらば頼光の御前にて申べしと。而骨と五ツ六ツ連打に打付。夫くと引立る猶く玉体安全の。御祈禱と晴明が手早振てふ祝詞の聲。君の女御道善の御經の聲打交り。宛然神も影向し佛も來迎有る斗り。佛法王法神道も。共に盛の花の山。今に古蹟ぞ廻りける。

第三

東寺の四口表木がつかむ 八百兩の金さけ

こゝとよばすと往すにわころ。君が見たさの鏡山。ひらぎの長が倉作り風にも散す日に枯ぬ。黄金花咲く梅と梅。もにあまりて園はし。二百余人の玉鬘。夕部くに産出と父なし金の掘取。茨木童子と名に高く。母屋は惣領太四郎が。鵜屋女郎屋親子して。銀商ひ金銀は銀屑と溜りける。爰に加藤兵衛氏綱と云ふ浪人有り。身にも譽持乍ら。未時にもわはた口浮世と忍ぶ柴の戸に。去る彌生やそらひ花。獨娘と見失ひ足手限りに身と碎さ。尋廻れど影も見ぬ鏡の宿にぞ着にける。見馴ぬ里の賑しき。行通ふ女郎の年格合同と程なと見るに付。もし此里に居ぬ事と尋ぬるも面ふせ。聞ねば心落付す摺違ひ摺紛れ。一ツ所と行戻り案じ佇立み居る所へ。北向の妻側が袖と控へて是君さん。旅のお人の近付も無さそうな。局へとんせしのはりと知人になりんしよ。ナ、過分く客にも成ふが。先密に尋たい事が有ると。云せも敢て尋たい事合點じや。私が位ある。極つた通り五分でとんす。安い物じや道入らんせ。そんな事では無い。此曲輪に居る禿子供の親里所は知てかや。よく私や禿道ふたことは無し。女郎のさもし其様事何のしる。まわ道入らんせと引留め。此三十日客せねば。賣物で無い様な味な所が有とる。まわ御座んせと引止る。いや先重ね

てくと武者振附ともぎ放し。鬼一口と通れし心。眼と塞ぎ鼻摘みひらぎ屋へこそ入にける。内には見馴ぬ風俗の迂散らし氣な大小に。さすが袖にもあしらはず。亭主太四郎様手として。何誰のは見馴ぬ人。我等はひらぎやの太四郎とす者。御用は如何と云ければ。拙者は京都浪人者。一生に傾城と物申したと御座らねば。揚屋衆に近付無し闇魔の廳の訴に。たつた一夜太夫といふ者買ふて見たし。路銀の餘り一兩二分是と貴殿に渡し申。然べき様に頼入と演ければ。太四郎手と打投打明た仰れ様。夫が結句野暮の粹女郎にお望は御座らぬか。いこのなく。太夫でさへ有ば誰でも構はぬ。申し女郎と申は面々に間夫と申戀が有る故。夫への心中大方初手は振ます。其手管でお目と盗じとも有る。左様の時に得手のお方が今宵一夜は已が物。一寸傍と離さぬと頑固しいお方が御座ります。其な事も御了簡なされまとの。構はぬ。振度は振つしやれ。神樂の鈴程振つしやれ。只氣立の能びのしやのせぬ太夫と願む。太四郎悦び是や女子共。俵屋へ往て千代様呼で来い。盃持来い。小座敷の炬燵へ火と入れい先此方へと奥座敷。私は隠居へ一寸見舞て後方お目に掛りましよと。雪踏も足の横町のこそく宿へぞ走行。平木屋よりと聞く嬉しき千代は心たぐりゆ

く。遣手禿も跡のらと。引舟いらす走込客の事も問はばこそ。是龜殿。太四郎さんは何處へぞ私に来る事知つてのや。まぐ成程。且那様の御合點。障無いお客さんね座敷は中の間へ。千代さん御出と引合せ。位の有る松の床柱。順と廻れて密添の無事有事しやら聲に。上する女子の取廻し盃斗り投入の。はな紙袋に有合は露も打たき風情なり。龜が勝手へ立と見て加藤兵衛居直り。先以て今日はお出添い。我等太夫様方と呼まする風体な者で無く。身は都に住乍ら。女郎達との詞と交せしことも無し。況て此廓の何誰が何誰其名も存せず。亭主太四郎とやらが心得と以て。不思議にお目に掛る事返すくも悉し。一言とや武者者。馴々敷事乍ら盲目蛇に怖すとやら。身に迫つての物語り。我等が兄弟より親敷者當春十五の獨娘三月より行方知れず。狐狸の仕業のと夜なくの太鼓鉦。人買人賣の手にも渡りしものと。京都伏見の遊女町。山々谷々搜しても今日迄行方知れず。殊に母もなき者父の歎き御推量。死したるに極らば責て休成共と。親は狂氣の如くに成り。子が承らへあるならば親の悲む一倍と。親子の心思ひやり我等が身同前に。斯様に尋なり。禿子供に思ひ當の方あらば。お尋もや度扱てこそ氣立の能お女郎とは望みしぞや。色も無く戀も無

く。大事の女郎に立入し御物語り。嘸譯知らずと思されん。是も心の遣方なさ。不調法は御免なれどはら／＼泣て語りける。千代は眞紙手に取て。ま初めてのお客に。泣たの是が初ぞや。些違ふの違はぬ。女郎の成立の皆夫に似たる事。親の歎き御念頃の中ならば左こそと思ひやられて。私が昔も今更に袂と絞る斗りぞや。此扉の女郎屋私が親方始として。禿共多いとやて廿人の三十人。肝煎口合有る内に親本體の判と取り。吟味に吟味が廊の作法。此太四郎様のお母屋は。平木屋の長とて隠も無い大體。太夫斗が五十人天職が七十余人。圍ひの端のと二百人に餘つて。禿共さへ百人餘事の多い中なれば。何の筋の何轉けて。お尋の娘子の御座るまい共やされず。ま何ぞ知らせて上たやとしみ／＼泣てぞ語りける。表口うら忙し氣に走つて来る禿の聲。後屋の千代様の奥にあると。突と通つて鼻紙の中ら出すの文。太四郎様の。お前へ進せとおしやんと。文と渡せば讀取も叫びは叫びて。顔さ合し横顔と。能々見れば尋ぬる我子の横笛。はつと嬉しき抱付斗。親は愛にと云んとすれ共人目有り。人の思ひ我思ひ。涙の／＼心の水わくせさするを道理なる。千代が心は懸一筋。脇の顔には目も付す。一寸往て來ませうと。文引渡してせ／＼し

やの小秘はら／＼立出れば。共に後とも振返らず。連立急ぐ我子の振。禿衆／＼。一寸爰へ借ませう。あゝと見返りや父様のいの。ま高い／＼可愛の者や。床しう御座ると斗りにて。抱付は引寄せて。聲と飲たる涙泣親子のさまを哀なる。加藤兵衛涙と押へ。春より今日が日迄尋余つて。最早此世に無い者と思ひ極し上乍ら。若やと爰へ來りしに思ひも寄ぬ此体。何として淺間しい。君傾城に遣はるゝ禿とは誰が爲したるぞ。何なる者に欺されしぞ。不便の者の有様やと聲打萎れ云ければ。父様に嘆きと掛け。我身も憂目見る事私しが心の愚さゆゑ。過し彌生やすらひ花の歸るさ。白髪頭に赤顔本人らしき親父めが。加藤兵衛の娘の。小さい時に逢ふたれば定て其方の覺へまい。扱も／＼成人加藤殿へも無沙汰した。永の浪人笑止な。其方と頼光様の御盛所へ御奉公に出そふ。親の立身身の出世たつた今加藤殿にも談合し。お主と爰迄迎ひに來た一寸逢する人有りと。詐とどの夢にも知らず。父様の合點なら何なりともと連立て。舟に乗せ駕に乗せ。此所平木の長へ連れて來て五十貫とやらに私しが一期と賣渡す。ま其管で無い爾で無いと泣ても叫びても聞入す。長が手に渡りしより。間がな隙がな途てのけふ。走つてくれふと心掛る素振と見て。慥食邪

見な親方が五十貫に買ふて。一萬兩にもする奴じや。其根性と直さぬると。縛つて長擗に吊下らるゝ時も有り。柱と横に渡して。足に石と拵付け木馬とやらに乗られ。夏の夜は裸体にして。桶込に拵付け蚊に責らるゝ時も有り。食と留められ打叩きの常の事。泉水へ身と投て死なふかと思へ共。責て父様に爰に居ると知らせたく。不繁昌な女郎衆は私同然の責さいなみ。小蔭へ寄ての兎角命が大事じや。地獄へ落たと思やと朋輩衆の情にて。一日く暮せしが拵り叩られ小刀針。身内に明所は御座らぬと。語る子よりも聞く親の。心に釘針さす如く。共に歎き沈みしが。憎い奴原しやつ商人。其親父めが名所は聞なんだ。手形の時見ましたが。北白河の廣文と云ふ奴じやけな。何北白川の廣文とや。名所さへ聞たれば政道明らけき頼光へ訴へ。其廣文め獄門にかけ。其方の曲輪と安々と取出すは今の事。去年ら其間にも必らずく。一夜でも遊女の勤して身と穢せば。重て武士の妻と成らず。一生の大事ぞと語れば横笛又泣出し。夫が悲しう御座んぞ。母様の御座終に貞女兩夫に面見へすとて。夫一人の外連の男に手とる取るぬもの。女の大事は一ツと暮々の御遺言。胸の守りに掛て居る。去年ら近い内格子へ出す。太夫にぞるとの用意と叫

けば。責に逢ふより悲しうて死ふと思ひ詰ましたに。今お目に掛れば心に力頼も有り。片時も早う取返して下され。氣遣ひとるな今の事。夫迄は親の名も人に語るな涙となど。云へども洩るゝ親子の涙止め兼て居る所へ。遺手のなべが薬籠聲。沸騰つたる顔付して。此方のしんべい爰らへり見へぬると。奥へ通つてこりや爰にじや。早今から野良のはくの我身が爰へおじやつて。もう背丈が伸た連。一日も太夫様方に付もせず。供はしやらず。眠たい目はしやらず。朝晩仕事は研磨さ。もう半年も居やれば。氣立な且那樣の手並と忘りやつたか。又しては遺手がぬるいゝと膝の傍杖喰をふな。何野良のはいて爰に居る。因果めとはりこのす。おりや遊びにや來ませぬ。太四郎様から千代様へ文持て來ました。夫それが木馬の元。若旦那の太四郎様には京から御座つたおゆら様と云ふ。歴としたお内儀様が有ぞや。此此眼に見へぬ。千代様と若旦那のこそく故。おゆら様どのもや。くが此耳へり入らぬ。内のさだつが面白。悪魔め連の儲と打天狗め連の突伏せ。下がへに手と入れて太股と。捻上げく捻上げ共聲立す。痛さと堪ゆる愛涙盤に落てはらくと。齒切しても加藤兵衛出るにも出られず。云へば云負け武士の娘と下主女に。みす

く親の見る前でもいなまする無念やな。飛掛つてや突通さん真二にや切殺さんど。刀に
手とは掛たれども。切て誰ため遣手には咎も無し。腹立る程我子のひしど。堀立心押鎖め
遣手衆憎いは道理く。其方の娘の持すのと。聲と涙に響せて見ぬ顔するを哀なる。こ
りや。容様達の手前も些の恥のしと思へ。其遣放しな根性で今から多くの殿達に。しつ
はりく遣らるゝ。とつとどうせよと引立れば。やお容様。餘所の娘が折檻に逢居る。
不便なとやと苦に持てくだんすな。私や痛うも無いぞやと。笑顔に懸るはらく涙道立
れてぞ歸りける。門と見送り立つ居つ後に焦るゝ親心。多く有家は知れた。順光の御前
の訴の上下も目数と取る。今宵一夜も見捨ては親も命が堪らぬ。親方平木の長と太四郎
は親子とや珍重く。長が邪慳無得心の者なりとも。鬼でも非ず畜類にも非ず。後奴も子
と持たれば親子の哀は知るべきぞ。某が大地に手と突き頭と下膝と折て口説ならば。帯た
る我大小の義理にも追つて。開分ぬ事よも有るまじと。夢主が歸ると松繁る小庭に佇立居
たりける。間夫の鶴羽産打波の。おゆらひ夫太四郎がこづの胸倉掴合。敷居で轉々雪駄は
飛。引摺込で上口。動と打付是太四郎殿。千代殿のものやく知り扱て居るぞや。今日も

けふ此方が門と出て行と。千代殿と呼に来るや合點じやと。裏の路次から密と出て。ころ
く宿へ仕掛て一のら十迄見届けた。此方衆親子の商買は何ぞいの。女郎屋と揚屋と。内
の女郎と余所の揚屋と間夫したら。此方衆親子がさよろりと見ては居まひがの。まづ其如
く。餘所の大事の立者の太夫と。揚屋の身で間夫狂ひ。廓にはつと妙法有れば第一商買の
妨げ。女房が阿房じやとゆらが鼻毛が讀るゝわいの。今斗り云ふじや無い。何ぞ云へば氣
の通らぬ幣氣の一口に云込。何んと粹は幣氣せぬ物とは何處の法の度ぞ。何處の法の
極めぞ。まゝやくと試者振付は取て突退け。胴骨と踏付く。已か何所へ女房呼はり。
其腹持ても女房の。七月の京土産既に此太四郎に。男の一分と捨せうとよふしたな。女
房で無い出てうせよ。去狀が望なら千枚でも書て遣る。男共女共引摺出せと聞けば。家内
騒ぎ立先親旦那呼で来い座敷へ聞ゆる門へ人が集ります。陳ましやと騒ぎける。ゆらけ
らくと打笑ひ。ま改まつた事斗。此お腹が今見へたの。私り京に譯有て。此所へは下る
まいと云切て居たれども。此方の親御が懐妊大事無い。其子は太四郎が子にして已が孫に
極る。茶屋楊屋の嫁にそこらは構はぬ是非におゐて貰はふと。父様どの固めで嫁つて来た

私なれば。此腹な子は此方の子。親旦那と三つ金輪でけんはくばはれで産で見しよ。人の浮名立ふより此方の浮名嗜ましやれ。よこいつ流言吐め。女房日早はゆくまいし巳斗りが女。此澤山な女子に。身持な合點じや嫁に取らふと云ふ。安房な親が何所にある。大恥らぬ中出てうせふ。左無くば取て引摺出とて小尉取て引立る。門口より親長は黙れく喧ましい。太四郎黙れ。もらも黙れ。こりや千代に勤とさるに因て。間夫の何の喧ましい。順と受出て本妻にせい。町の分限者共の程の事此長が任兼ふる。疾に内証聞て置た。八百兩では今でも婿の明くやうに。俵屋と談合締て置た。ヨ、ヨ、ヨ、わねが親と云ひ交した詞一言も違へぬ。京の東では住吉屋のもらと云ふては名と取た娘じや。よこふぞ此方の格子へ出したれば大儲するものじやと。見込で親へ貰掛たれば女郎には貰ませぬ。殊に大盡の子と懐妊して居ると云ふて婿がぬ。其處で此長が思案と以て。拵へにも懐妊にも拵はぬと。一杯喧せ先嫁に貰ふて。後では其腹な子と流にして勤させうと。此長が胸一ツで斯うらくんだ。そふなうて六匁と云ふ禮銀と。何の價に出そふをやい。此様な手練とせねば分限者にはならぬ。是が已が商賈じや。其腹な子と置せ。今宵あら此方へ

来いと云へばゆらは返事無く。只伏沈み泣居たる。太四郎聞き兼進み出。千代と受出し下さる御恩の海山有難し。ゆらめに勤させふとは。夫で此太四郎が若い者の一分何と立ふと思召。歴々のお付合京都迄も聞けた。平木屋長は嫁に勤とさするは。息子の太四郎は女房に流れと立さすと。悪名と立られふより同じ恥とるく手間で孕女と拵た方が遙にまし。ゆらめに平産致させ私の子と致し。お前の詞も立ませふ其上で何と云ふ。親へ戻して下されと。云せもぬへす氣の弱い。あいつと親へ戻して。千代と受出す八百兩は何處のら出る。物じて酷い目と見まいと物の哀と知たり。人のおれそれ世の中の義理順義と。知るが最期貧乏神が乗移る。此春抱た廣文が口入のしんべも。明暮泣廻れぬもた、さ込賣伏て五十貫と纏て五千兩にして見せふ。ヨ、此ゆらも前出した六貫匁。千代受出す八百兩五層倍にせにや置ぬ。男共ゆらと此方へ連れて来いと。立んとすれば太四郎止めて今暫く。申親父様。ゆら一人が無ければとてお前が貧乏なざるの。假令あれも金銀の山と築ばとて。太四郎様の内儀と云はせた者に道中させ。私は生て得居ませぬ。子と産して波風立ず法に何の手はつらぬ。明日より此太四郎に人交りもするなどの。御了見頼み奉つると手と合せ

詫ければ。もらも只御恩には。京へ去して下されと泣より外の事を無き。我子の恥と聞き入れてそんなら何成と。墮しなりと生せなりと埒明て京へいなせ。今宵の中に俵屋と通屈して。千代と明日ら呼取り。此八百兩の戻る程よの女郎共とせつちやうせいと。酒香童子も其所退の。茨木童子がつのみ頬片腕切たき斗なり。加藤兵衛聞は聞程力落。わの心では泣ても口説ても聞き入れはよも有まじ。生中云出し仕損じて後日もうが。兎角頼光へ訴へ御威光で無んばと。思ひ定て座敷と立ち。是御専主。勝手も殊の外取込と見受たり。我らも今日森山迄参る用事ゆゑ。お連申と笠追取。重てお出と云ふ聲も聞捨てころ出にけれ。長跡と見送つて。あの様な奴客にすな。何のニツや三ツ宿したとて塵埃。小喧しい置たがよい、もう去ふ。モリとつぞ来い。猿め先へいて善哉餅云ひ付よ。小豆は舌に觸る。京の龜屋が羊羹と摺消してせいと云へ。太四郎も来いと立出る。今の榮華は喜見城。女郎の爲には恐しき鬼が城へと歸りけり。東宮兼仁親王七才にて御位に即せ玉ひ。攝政兼家朝政と正し。武將源の頼光非常と誓め玉ひしるば。聖の御代の九重や民の訴無りしが。永延二年の比よりも訴訟沙汰人日々に増し。頼光の門前は夜の内より群集して。御門の明とぞ

待居たる。夜も明行は頼光決断所に出玉ひ。季武貞光執筆の役。檢非違使左右に着座して庭に隨兵兵具と携へ。御門開けば訴訟人。我先にと込入しと貞光進で。騒しく。御批判は後程名とさして召出さん。先面々が訴訟のしな帳に付。夫静めよ。承まはると隨兵鐵鞭振廻せば。さいと静まり踞いて皆々帳にぞ付けにける。恐れながら私は上京西陣織殿屋の孫三郎と申者。十七に成年季の織手。一昨日の善方より行方知れず失候。親請人に尋れば却て此方と恨口。御威光と以ては詮索仰ぎ願ひ奉る。故郷は錦の小路の者と。口上の趣と貞光帳にぞ認にける。我らは二條室町糸商ひの吉次とや者にて候。一人の世倅に一門中より嫁と取。里歸りの道にて見失ひしとやて。今に戻さず候へば御詮議願奉る。我らが爲には姉が小路の針屋。従弟同士と繰返せば同じく帳にぞ認てけり。次に年頃六十餘りの女房は。柳の馬場のおこうとや綿摘教へる寺子取。十二と三になる弟子が二日に二人の行方知れず。お慈悲に御詮議玉はれのし。人の小娘失ひて未來の摘綿親々の恨は宛ら眞綿にて。首べらるゝ思ひなりと涙と流して訴へける。私は宇治の里梅田とや茶師にて候。十入才の娘寝屋の内にて姿なし。側に臥たる下女に問はこちや知ぬと申なり。細に御詮議す

さるべしとぞ願ひける。私わたくしの今熊いまこまの貞月ていげつと申比丘尼ひしやうにのお寮。廿三四の弟子二人鞠進くまじんに出今日七日。今に歸らぬ御訴ごせう則其比丘尼の名。一人の貞倫一人の又貞觀ていけんとぞ申ける。是は深草土器師ふかぐさどろし明て十四の小娘。何者の仕業しわざにや首も肘も引抜て。腰より下の殘れ共骨の碎て候と。泣焦なみぢれて申も有り。音羽山の焼物師。女房が頭あたまの鉢打はちうち破れしと云ふも有り。油の小路の傘屋かさやが女房武者むしやの小路の具足屋ぐそくやの母。お室の麴屋かまど吉田には八百萬屋。御幸町のちご醫者六條の豆腐屋。七條の袈裟屋けさや狼谷の衣ころも。櫛笥くしげ通の紙漉かみす押小路の酢屋すしや。三條の取上婆々娘おばあさんと失ひ妻と奪はれ。伯母は姪めいと尋ねれば妹の姉と見失ふ。兎にも角にも御詮議ごせんぎ有り妻の行衛ゆくへと知らせてたべ。娘に逢せて玉はれなふお慈悲成はと聲々に。泣悲なみひむ有様あさまの閻魔えんまの廳どうに罪人の。罪と悔くわいむも斯ややらん眼も當あられぬ次第しだいなり。頼光も落涙らくなみ有り此比の訴人。御論出入ごろんしゅいの事こと無く妻子と失ふ訴へ。春より帳面八百人に及べり。や汝ら。是の丹州大江山酒香童子が所爲しよゐなる由。弘徽殿こうきでんの告つげに因て某討手それがしと蒙かかれ共。幼主御即位大内守護おんしゆゐだいないしゆゑにて延引せり。近々に大江山おほえに分入。生たる者は連歸つれかへらん。死したる者の敵と取て得えとて入さぞ。眼に見への變化へんげ成りとも。源氏の威光ゐかう弓箭くわんせんの徳滅はろけさで有べき。靜謐せいひつの御代となし追付おしづ歎

と止とどむべし。罷立まかりたてと仰ければ、有難ありがたやと一同に。わつと叫なひし其聲こゑの大路おほみちにひゞき哀あはれなり。爰こゝに四十斗りの男子高欄たからんの下もとに突つと出。某の粟田口あしやぐちの賣者うりや加藤兵衛と申者。横笛よこふエと申十五歳の我娘。當春加茂の鎖花くさりはなに参り其より今に行方知れず。度々訴せう申せ共變化へんげの業わざとて追返おきかへさる。是御吟味ごごんみの暗くらき所。變化へんげ流行りゆうぎやうと幸に人商人ひとあしやの延のび候。此御心附ごごころづざるの御政道ごせいだうの失ならずや。御詮議ごせんぎ下さるべしと懼おそれ無なく訴せうふれば。季武きぶ聲こゑと荒あらげ。御政道ごせいだう暗くらしとは適あれ已いの嗚呼めいこの者。して汝が娘人賣めいに取られし證據しやうこや有ると腕うで附つる。加藤兵衛かとうべゑ些ちとも臆おそせずさん候。江州鏡山平木えしやうきやまひらぎの長が元もとにて。娘と見附候故詮議ごせんぎと還かへ候へば。北白河の廣文と申者より。料足りょうそく五十貫文ごじゅうくわんぶんに買取と聞より早く。廣文が宿所しゆくじよと尋ね候に此頃他國たこく仕る由。去いに由よて恐れ乍ら御威光ごゐかうとあり奉り。武將ぶしやうよりの御召ごめいなるを廣文が妻子まゐし召連めいづ來るべしと。所の庄屋しやうやに申渡し候へば追付引連おしづひきづ參るべし。對決たいけつ願ねがひ奉ると懼おそれ無なく言上ごんじやうす。頼光らいかう聞きき玉たまひ神妙しんめうく汝が詞上ことばかみと懼おそするに似たれ共。却て政道せいだうと勵ほます一助。我何われなにぞ下聞かみと恥かんと玉たまふ所へ。北白川の土民共。廣文が妻子まゐし召連めいづ參りしと四十餘りの女房。十四五斗の娘の子庭上ていじやうに畏る。頼光御覽らいかうごらんじ。廣文が妻子まゐしの已等おのれらよな。夫の廣文粟田口あしやぐちの加藤兵衛かとうべゑが娘と拘か奪わし。鏡山の遊

女に賣たる條紛なし。定て汝もよく知つらん夫が宿所に居ぬよし欠落の。但行先知たるか
 眞直に白状せよ。少も陳せば拷問させうするはとの玉へば。女房聊悪びれず。夫の悪事と
 女の身にて存せねば逆。同罪逃るべき様なく候へば。陳しても益無き事左様の事の夢にも
 存せず。いの様過し森の比古朋輩の合力にて。浪人の營みと助のりし事も候へば。若其子
 と賣たる價にてや有つらん。それも委敷存せず又欠落のどのお尋。假令首と討るゝ逆。逃
 隠るゝ様な夫にて候はず去乍ら。一夜に變る人心夫婦の中とは申ながら。斗らひ難しと
 を申ける。健氣なる申様。天子大堂會の前なれば死罪の宥め助け置。北白河の庄屋幸寄
 廣文と尋出し娘と急度渡させよ。加藤兵衛も鶴山に同道して受取れ。違背せば連來れ庄屋
 其旨承れど。御座と立んと爲玉へば親も庄屋も詞と崩。其間妻子共逃走りも氣遣し。逆も
 の事に廣文出る迄此女。牢舎仰付られしとぞ願ひける。頼光打笑玉ひ。逃ると云ふ共
 唐土天竺へいよも行まじ。津輕がつかう筑紫の果王土の限りの武將の下知。僅に圓ふ牢舎
 牢屋といふ云ふへらさず。頼光が許すと云ふ詞と出さぬ其内。千里が野邊も牢屋たり逃
 ば逃せ。頼光が一言の千筋の繩を罷立と。籠中に入り玉ふ。文武の籠のとうくと賊有て
 狂あらず。實に名將の源の水上市清き印には。世々に流れて家々の。平橋藤原や八百八十
 氏の多けれど。めぐりくゞて盡し無く。酒源の御代に住む民に幸有とや。

第四五

植込の大江山 築井は九格子の唐櫓

月も日も庭より出て庭に入る。廊の内の武蔵野や。平木の長が廣庭の。光琳風の築山と見
 渡す眼さへ遙々と。谷の岩組九十九折。筑波の山も恥しの森と繁りし植込の。華麗と盡す
 物好寄の。松の造木造枝。庭の松風三味線の天柱に通ふ細廊下。敷寄屋が軒の南天に。珊
 瑚珠繋ぐ玉簾軟のひみやのぎ躑躅が岡。梅や柳の花紅葉。天より四季の仕着して。手形の外の
 色すくめ。金すくめなる身の榮花。金の冠と被ぬ斗しやくは持病に有とや。兼て催と槍
 舞臺も成就し。今日こそ爰の能三番過て中入の。熊野より直にお行水盡所にはとや
 くと。五色の赤飯蒸立る。鍋釜有たけたけくと女子呼つと男共。見物場はく水と打樂
 屋に接ぐ衣裳場は。お出入の敷針立。算用足すの掛倒れ傳授覺えて手の利ぬ。古敷のな
 らずもの。其外萬能一心の家業なし。扱も出來た遊ばすくと。采とる能太夫も既足じやと
 輕庵取々御機嫌伺ふ折節。湯殿の内よりお上りと呼はれば。と答へて禿共。鈍子細繩

天鷲裏のらつこの蒲團三重ね。沈の勝息煙草盆。湯殿と出る平木の長頭の鉢に立いげい。富士の烟の上も無きはとび過たる湯上りの。お伽共がお髭の座扱も熊野の面白さどうもく。能い衆のお客達が先々の衣裳の結帯さ。大名も叶はぬどの御評判。お行水なされて追付松風。皆待兼て御座ります。行水心が悪い。水斗りに五人三人掛つて居て。京の水と切して掛り湯にあふ坂の水と遣はせおつて。扱肌の塩梅の悪さ。金次第でならぬ事い無けれ共。汲立の京の水と嵯峨松茸のとりく。此二色が心に叶はぬ。松茸時分に上りたいが道中が太義な。舟否なり馬嫌ひ認はふらつく。福庵お主のじたい京生れ。もし賢公家に近付が有ならば。御所車一輛買ふてくれ。乗て歩こと法闢も無き。月蓋長者の隠居せられしごとくなり。見に来る人のそらだまは。匂ひ渡りし橋掛り二三の松とけふり来て。樂屋にちつたんはの調も伽羅に埋れて。鼓の音さへのはり来る。あれ鼓と調るのもら次と始める。己が案内する迄始めるなと云ふて来い。此間何れも勝手へ立てしたためく。我も飯喰はふ膳と出せ。そりやこそ御膳と呼小鳥古錦補の膳はひ。鹹しらの取勢次も盡言で御座らぬ本膳の。しゆん正詩書假千金。わけはん高つた二汁七菜手と掛す。

餘所の振舞平木屋の朝夕とこそ据にけれ。七度搦に七度節ひ。誰が水晶と飯にして精厭はぬ白鷺の。せり箸して無機嫌顔。何と世界にもう喰ふ物の無い。明ても暮ても鯛の鯛のと喰はれぬ物斗り。此二の汁の鳥の何じや問て来い。問に及びませぬ何かな珍しい物と逆。生體のお汁と云ふよりくはつと色と損じ。鶴と云へば結構な物らと思ふて。今時分の鶴脂がなふて喰はるゝ物の。打明て大に喰はせ。今持て来た平皿は何じや。是は生鮮で御座ります。わぎく若狭へ飛脚と立取寄たと申されます。若狭へ取に遣つた。こりや出来したと機嫌と直と食好み。朝暮珍物高直の魚鳥は直に小判らむ。齒骨も茨木童子なり。思ひくの大盡の。妓の威勢と劣らじと能の祝儀の贈物。花とはいへ木とに咲。花の時節はそきわりの。雲足蝶形とささかた五重ねの島桐の。紋と透しに手と込て奥州が名と忍ぶ客。三五に義理とはりまがた。飾様よりとはのめらす。花紫が深い客。長堀のすいさ金糸の網ととらけてひげこに込し祇園坊。半々御ひいさ弓も引方鞍のお客と云ふも有。銀の毛彫の飾笠宇治の花香と其儘に。のめし昔も今橋と。あふ夜が客の名に渡る瑠璃白玉のふらすこに。ちんた泡盛薬と汲むや玉の井が。お客よりぞと我れ一に。即終絹

金木夫。長門薄雲初紫色品つくも進上に。能客持て全盛と。先親方の機嫌取るひとさぞ思ひ遣られたる。長大きに笑と含み。是は太夫達のお客方より今日の花の。扱々念比な過分く。是と云ふも其方衆が精出し客に廻つて。親方大事に勤むる故。去乍ら勤くと思ひ酒過し煩ふて下さるな。お客の傍で嘸氣詰り。ちとの間なりと寐轉んで休息なされ。親方と思ひ氣兼は無用。我等が大事の金箱達と。ふはと乗ても荒馬の轡に手綱ゆるされず。中にも長門は姉女郎。のふ奥州さん半ぶ様何も。旦那さんの能御機嫌。今の御訴申さふでは有せいらつとつと出。折がなく此お願ひと朋輩残らず申合せ置し。あの病人白妙殿の事。旦那さんも油断なふ醫者衆もへ養生の機やなれど。次第く病も重り金の儲で薬いでも。此度のあつち物と醫者さん達のお咄。其身の時節是非に叶はぬ事乍ら。痛はしひいらの西國の吉様といふお客。新道のらのお馴染の我々も存せし事。速も死ぬる道ならば。一日なりとも曲輪の外で死なせたいとの歎き。我人慕なひ勤の身。兩方の心思ひ遣られまど。此事の井筒屋のら。度々お耳へ入し事。今日別して惣太夫中天神衆残らずの御願ひと。半分云はせすこまだる。跡と聞迄もなき。了簡して白妙に暇くれと云ふ事

か。ならぬ事。白妙と云ふ奴でなんぼうの損とぞ。三十日餘り煩ふて勤いせず。薬の喰ふ人手の取る。じたい此吉とやらいふ田舎客めがきたない奴。六百兩で暇くれいわたゝのに。千兩の小判耳が欠てもならぬ。定てけふは此客めが見物に紛れて。逢に來る手管が有ると推量し。あれあの鼻の先の數寄屋へ病人めと打込で置。皆見舞に行く事無用と承めらるの奴等でも。白妙に水でも喰はしたら棒縛り。新道の横笛め浪人の娘とやらぬのして。頼もし立すると聞。數寄屋の側へも寄たらば。縛始めに括しわけてくれると云へ。客が大事宜けく。始の笑顔引のへ忽地に闇魔顔。面と被るゆる如くなり。奥州些とも恐氣なく。こりや旦那さん共覺へぬ。お客のら千兩出る程なれば。私しらがなんの口たさやしよ。餘り夫は情ない。酷い御座んす旦那さん。何此長と情知らぬ酷いどな。扱ひ客に頼まれぐるに成て訴訟か。六百兩に付ると千兩といふ身共より。酷いといふは客の事。知るまゝと思ふ。白妙め其客の子と孕んでけつる。見とく我子と持ごもつて死ぬると見捨て。まわ四百兩惜む物知らず。是が酷い有るまゝ。愛と引はつて千兩取る。但千兩損するの。愛らと氣強掛らねば傾城屋いならぬ。獨に情掛れば跡々の例に成。情知らぬ親

方とすねはたばつて勳頭末にぞる奴等。棒の先で勤まらしよ。いふな黙れと睨付れば。なんば黙れと有ても此長門のたまらぬ。千兩の損徳の白妙殿獨の上。私始あまたの女郎。忝い頼もしき慈悲な親方と思へば。心まじしう一人の客も取外さず。内の爲に成嫁にと身と忘れて勤めむ。はんにいふじや無れむ。能の雛子のと榮耀榮花に誇つて。朝晩王様のあがる様な二の膳三の膳。酔いの甘いのり誰がいはと。旦那さん。數々の女郎の心がそれたら。五千兩や七千兩の損が見たい迄。其願が三間程横町へ飛やんしよ。旦那さんとぞせりのびらる。さつともく憎い奴。女郎のお蔭で榮耀するとは。世界中の譽屋に。賣て長が三分一真似る者が何處にある。持て出た身の果報でぞる榮耀。願が三間程曲むの曲まぬのは見よと立上り。兩足にて蹴て蹴て蹴散と本膳二の膳。刺身の鯉のものに躍り。ねり味増のふるまぼうとるぼう。鯛のあへ物飯も汁もがんぞうなまそ。けんに置たるめうがの程ぞ恐るしき。有合ふ女郎めつと斗に逃んとそ。こりや一人も動くな。遣手共男共總持て來い棒持て來い。頭取の長門めとこづる摺んで引寄する。一子太四郎鼓片手に素袍袴。是々舞臺へ聞へると走出。先御堪忍くともぎ放し。まつと睨付是女郎共。なぜ御機嫌と

損ふ。面々のお客と捨白妙が愛へ出る事の。重てぐつ共いふたらは此太四郎が堪忍せぬ。慮外乍ら親父様も親父様。今日ハ歴々方の集り。家内にての我儘に點打人の有まじと思ふの我身一分の理。世間の人かゆるさぬ。其證據御覽なされ。只今我ら此敵と闘べしに。御存の折居の胴。打て見ればぼとくと桶の底叩く様なり。肝と潰し皮と外せば何者の仕業に。胴の中にお前の悪事。一家の悪口と料理の献立能の番付。二通に書て入置し。無念千萬此如く。後指と指るとは知らなんだ。一分が癩つた。顔も涙が溢るれと。是お聞なされ料理献立。御汁世上の人と薄味増。自慢臭い葱。面の皮午旁二ツに切鯛。明日御飯衰物は傾城打擲の棒。焼物は取沙汰はうく。人間のくすだまりのけて。奢る者久しから。漬の香の物。引てよめな。さるぼう。はぢのきの吸物。あへの女郎伊丹諸白。口惜い皆迄まだく讀れぬ。是又能の番付大きなせんさいさんくそ。脇能身の程としらひげ。八島のくづれ。諸道具のけばの梅。兩の手にらなわ。世間でうたふ。親子籠たいこ。跡の天鼓みぢん。聞つしやれたる親父様。親子の耳へ入らば國中は一ぱい。何と恥と雪がふぞ。ま、く口惜い無念やと。すんくに引裂。灘に打付くてどうと座り泣居たり。ま、

氣の小さい其心で長が跡は次れまい。此榮耀の叶はぬ奴等が皆妬んでいふ事。何年か此方人の噂に乗る男。夫程身代ふるてくる。ひよつと人に賛められては跡の身持がむづかしい。云ふ奴には言せておけ。難はぬ〜あれ狂言が始つた。松風の用意せう。装束共持て来いと。ひるむ氣も無き氣の強さ。そも人間の皮一重下の怖し表皮の。まづ美しき上臈の面と持せて入にけり。表に嘘と松風の。爰にも吹て白妙が。身に染渡る病の床。誰わづらはにとふ人の數寄屋と云へど隙間なき。障子一重と明るさへ。力なじみの彼人の。顔見る事の叶はずば。實てどうの一言の便が閉て死たいと。知らぬ來世の暗よりも涙中有に迷ひけり。人に心とおきつゝみ。横笛が幼名と直に付たる竹の名の。身は川竹と成ためし。衣裳の模様仕立口。若馴ぬ物とむりやり手が。歩き振にも批難いふ。人目と盗みわくせきと急ぎにけらし。白妙が病の枕に立寄りて。お目明てのやと云ひければ。重たき目元じりりと見て。ちや横笛殿のいの。能い女郎に成てじやの。奇特に見舞て下されし。見る目かぐ鼻より怖しき親方の目と忍び。よく〜心に掛ればこそ。齡もいひで羨らしい嬉しう御座んす忘れはせぬ。暇の事と朋輩衆が身に替ての訴訟。端々聞へて志しの嬉しさと。親方の

愛とは何なる世にの忘れうぞ。吉様に逢ふ迄まちつと生たい〜と。今朝迄も思ひしが物いふとも力なく。此胸の苦しさは大方今夜が往生。是此方頼むぞや。此抱て居る紋付は故人さまの形見の袷。棺に入て下さんせ。持籠りて死ぬる身を目と塞ぐと其儘。井筒屋迄知らせて彼お人の回向が。受たいわいのと打伏して泣涙さへ翫り行。そんな事氣遣ひせず心儘に持しやんせ。私は常にも申通り。嫁入する迄身と自墮落に持なと。母様の遺言立まいのと。夫は〜悲しうて死なふ様にも存せしに。長門さまの才覺にて。此度の水上とやら云ふと。かの吉様とお頼もる。私に帯も解せずお主は問とらへ。床の側へも寄付ぬ様になされしゆゑ。今日迄身と汚さず。親の遺言違へぬ此御恩送りには。醫へ内へ漏聞へづたく〜に割られても。一寸なりともいさ世の中。逢せましたさ能見物に紛らし。顔隠してあれ迄と。いへば覺へず起直り。有難い忝い早う逢たいとれ何處に。あれ〜あれに居さんすと道出ると。是申何おしやんすあれは庭の松の木。吉様ではないわいなと抱留むれば。お扱は目も早眩んだの。もう死ぬるに問は有るまい。死際の顔と見せ。嘸吉様が悲しめる。私や又夫が悲しいとまた伏沈む斗なり。横笛見る目も遺方なく。早う逢度見度

と心の急は道理乍ら。あの入込の人々の目と忍び。橋掛の椽の下より泉水の際と廻らねば
どうも爰へは参られず。物敷いはず聲低に。お二人が顔斗見つ見らるゝと樂しみに。聲立
て下さんとな人が聞付見付ては。よし様は大事のお身跡の詮議が喧まし。必静にくと
呷く中に笛敷。おれ能が始まる此紛れに。首尾して連ましてやと行振は。何時の間にやら
里馴てしやんと擗取る飛石の。三ッ地五ッ地一せいの音にまぎらす忍路や。忍び男の忍び
風。つふりの上は橋掛り。うたふ諸の松風に。身は村雨と袖ひちて。涙に絞る類冠り。敷
も耳にびくく。秋風越ゆるは須磨の關。越に越れぬ金の關。盗みせぬ身も盗人の。忍
ぶに似たる篠竹の枝折戸口にイめば。白妙待兼。吉さまのいのと起るにも腰立す。立上れ
共足立す。男も垣に取付て聲と忍べば招合ひ。心の中に通せてとしと隔ての天の川。涙と
淵と堰掛る秘の逢瀬を哀なる。白妙漸々襟際迄通出て。ま一度逢度くと思ふ念が廻て。
轉しう往生しまされは思ひ置事無けれ共。大事の子と身に宿し淨世に廻し置もせず。未來
へ連れて往くわいのと。又さめくくと泣ければ。夫も前世の約束。引手數多の身なれば面
々の果報により。大名貴人の北の方ども成るべき人。思へは此吉は其方の出世の妨げ。あ

れあの諸と聞さや。身にも及ぬ戀とさへ。すまの餘りに罪深しとは我事よ。此下に重しは
二人寢し夜の其方の寢衣。形見に肌と放さぬぞや。我迎も同じ事。過にしと思ひ出せ
ば懐しや。三年は爰で馴染と掛。何事も皆夢と成。此形見の紋付斗りは殘れ共。是と見る度
に彌増の思ひ草。葉末に結ぶ露の間も。忘らればこそ味氣なや。形見こそ今は仇なれ是な
くば。忘るゝ隙も有なると。おれ諸に諸ふも理り。一日も夫婦連世に住甲斐の有るにこそ
忘れ形見何にしようぞいの。捨て置れず取れば面影に立まさり。起伏わので枕より。跡
より戀の攻來れば。詮方涙に伏沈むとぞ悲しき。折も折なる松風の諸が泣す二人の中。横
笛内へ立廻り。いとしや側へ寄度かまた五段の舞が有。此間にちよつと戸と明れば。吉
助前後の辨へ無く。是はと斗り走入抱付ば抱締て。語る事ない言ふ事ない。極樂でも地獄
でも附て往度斗ありぞ。悉く御座んすと。互の肩に互の顔打たれ合咽返り。泣く忍び
音に横笛もつれて袖とぞ絞りける。男漸々涙と押へ疊とたいて。心に任せぬ成れば成
行身の果るな。逆も死ぬるに極らば。一日でも一夜でも身が手へ引取往生させ。今生の名
殘に入棺も葬禮も。手に掛んと思ふ心一筋に六百兩と云掛しに。無得心の長めに足元見ら

れ。千兩無くては隠れまいと云葉つて埒明す。吉助が子と懐妊すれば本妻同然。僅四百兩惜んで、曲輪の中で持籠りに殺した。さたない奴と。人で無しの長めに下視する、此無念。身と切裂ても隔違らず。よくに立ぬ身の上咄。語つて益無き事乍ら。我親迄の人に知られし名有る武士。仔細有て浪人し。我五歳の時西國今の親の養子となり。氏と替名字と捨。算盤秤と取しより。生の親との音信不通。住所も知らねばまして生死の便も聞かず。今の親の商人の一錢と空にせず。手代共の算用嚴敷て。金銀の我物乍ら水の月。目に見る斗手に取られず。去共差た一腰の實父の譲り。大國二ヶ國三ヶ國の價共なる名劍。賣の身の指合代なして。其方が身の代と方々主と尋るに。是非もなや。我冥加に盡たる。千兩共萬兩共限り知れぬ此太刀と。漸々三百兩五百兩。六百兩より上に直と付る者なければ。神と恨み佛と恨み唐高麗へも渡られず。詮方更にあらはこそ。ひざくと曲輪の中で身と果たさず。不甲斐無き男持たよな。今の恨の此太刀我腹に突立ば。人の命の取べきが。白妙と云ふ女の身一ツと助けぬ物。實どの誰が名付しぞ竹の節には劣しと。柄とたゝき鑢と打のつはと伏て泣ければ。白妙も手と合せ余り冥加恐し。數ならぬ此身ゆる重代の寶

と故とどの。左程私しが可愛。因果な者に馴初て苦勞させますまいとしゃと。二人が終言悔言盡せぬ涙を道理なる。側に聞居る横笛涙に沈む顔振上。あれはや能の切果ると其儘衣裳脱に。あれらら一目なり。咎められてはどちらの爲にもならぬぞや。何時迄も同じ事。今が末期の暇乞。左らばで御座んす。來世で逢ふ。左らばやと立て見居て見羽振鳥。關路の鳥も聲々に夢も跡無く夜も明て。村雨と聞しも今朝見れば松風斗や残らん。夫や果た南無三寶始の道のり人立有り。樂屋のらり猶ならず。ハ、何處のら戻しましよ。其々其處へ親方が装束で。隠るゝ丈の先愛へと。白妙が夜着の裙に押隠し。横笛上に打馮れ障子はたぐさしこめたり。長い風折水干。後見お出入せやくと。ハ、出来た。殊に舞の内我も木蔭にいざ立寄ての思ひ入。息がはづむと大團扇あたくやら擦るやら。先面脱せませ。汗とぬぐへと寄たふる。長鳥帽子着乍ら。何と松風出来た。此装束で直に爰で自然居士として見せうの。脇の人のいが櫓楫と持て散くにうつ。身には繩口には綿の纏と嵌め。泣けども聲の出ばこそといふ所と。面白くして見せう。男共櫓の木の手持來いやいと呼ばれば。常の氣知りて下人共。二言と呼れず走り來る只今上幕入様に。面の

内らちらりと見た。病人めが居る敷寄屋へ。何者の逃げ込で。障子とさそと見た。われ
捜して引ずり出せ早う。用捨せば共に片端頃はぞ。はつちや怖しと會釋もせず。障
子と明れば横笛が身と違はして居る所と。旦那の御意じやと荒けなく人の持なす花盛り。
落花未塵に引出と。牌の臘強き大音にて。こりやびりめ。此長が日來の手並知り乍ら。今
のらのおとい根性さげ。後には己何に成。病人めに何用有て誰に頼まれた。さぬのさぬか
と振上げて。二三十滅多打起直ればたと打。居直ればちやうと打。髪も頭も分ち無く。簪
并打折て籠甲飛で亂れ髪。骨も散のと哀なり横笛聲も涙に暮れ。白妙様へ見舞ふたは誰に
も頼れませぬ。餘り見る目もいとしとる。今死ぬるお人にちよつと見舞にいつた連。
科寛意に成ならば殺し成とさう成と餘り旦那殿と。云せも敢ずらぬが口から殿呼はり。
其まつ裸にして庭の松へくし上り。はつと云ふより情無く帯引はさけば一家の女郎。其
程の科もない人と。こりや餘り旦那さん。新造は打さぬと駈寄る所と棒横たへ。一つ穴
の狐共と十ツ方滅法打廻せば。打れて左右無く寄付す横笛骨も挫くる斗。弱る心と取直し
る朋輩さん達怪我して下さんとな。私が事は推はすと置て下さんせ。是殿と云ふた腹立に

恥のしい裸にして縛りやつたの。何ぼでも云止め。旦那殿殿々々。情けない死なしやつ
た母様ならで。友達にも見せぬ女子の肌と口惜い。此よな姿は地獄の繪に見た斗り。鬼め
童子め茨木さうじめ。白妙さんと此横笛が亡念が。其方の身に報はふと。涙交りの雑言は
人の泣より哀なり。情い奴め。其男共盡所の大根一本持来いと。又五ツ六ツ續打打れて
雪の裸身も。消々どこそ成にけれ。申旦那様此大根何んになされます。何になさるとは
夫捨込。此大きな物をこもへ捨込ましよ。頼げた叩く口へ捨込め。長まつたと口押破ん
とする所へ。敷寄屋の障子蹴破て吉助堪らず飛で出。大根取て下部が面はたと打。横笛が
戒め捨切れば。半死半生是朋輩達。勝手へ連て看病あれと取て押退け。長が前にさうと塵
し。こりや長。白妙と二世の契約せし。西國の吉助といふ男。白妙が病氣見舞ふが科なら
ば。横笛よりも先此男打殺して腹と愈よ。打てふたぬの。長恐しいかなせふたぬと攻掛
れば。さ已迎も商ひ者に忍びあふのらは盗人よ。此長が打兼ふの。さ腰の刃物と渡せ。さ
此刃物が怖さに得討ぬな。さ此刀は少由緒あつて。うぬらが如き根性の汚れた。大國然の
奴に抜く刀じやない。氣遣せず共寄て打て。但怖いの。何の怖いと打て掛る棒の先確と取

て拂退け。突と入てのつき上大の法師ととんぼ返り。ぎやつとのめらせ馬乗に。どうと
跨り握拳に息吹掛け。セッハ十二三頭も碎けとはり廻す。一子太四郎飛で出。そりや親父
様投た打殺せ大事無い。まつらせと立掛り家内が寄て棒すくめ。漸々長と引退る。吉助は
只一人取付ばもきはなし。頬がまらゑんがまら。腕骨うで木障子の腰骨。肩膝足の踏をな
く。誰が打やらくらはとやら棒に分ちは無りけり。足は立す目は眩く。衣類も裂れ髪亂れ
心汗りの亂ねば。己いつかに傾城屋の法なれば逆。搦兇強盗と打とく。よつく恥と與へし
な。我親の世なりせば。一々獄門に掛る奴なれど。町人の淺ましき女郎屋へ忍込たる過り
なれば。此儘叩き殺さる。白妙死手三途と連立んと。廊下傳の欄干と。力に取付た
ぢくく。道うつてのよろくく。よるばひく歩み付。敷寄屋に入て。さ白妙の早
息絶しの先立しのと云ふ聲に。家内はつと驚く折ら。遣手の龜が忙た々敷。さ新造の横
笛様が剃刀で自害して。また死切ねと深疵。あう申す内も危しと色と違へて云ひければ。
左しものふとさ平木の長。さよつとしてこそ見にけり。(第五)のる所に北白河の廣文。
親子夫婦在所の者。加藤兵衛伴ひつのと入て。なふく長殿先程より公用に就て御意

得ること度々申入るれ共取合れず。當春我らが賣りし横笛取戻して。本親へさつと渡とへ
しとの上意は候へ共。其時の五十貫今更一錢無ければ。取戻さん力無さゆる。此翠柱とす
す我らが娘と代に取。横笛と此親父加藤兵衛殿へ渡してたべ。其爲所の庄屋組中同道致す
と述べれば。長不興顔にて。此方が横笛が爺御の。此方商賈の作法で。元銀に十倍増て
も。取戻その代りのと云ふ事致さね共。そこは身が了簡して遣ふが。其方の娘いたつた今
自害して。十死一生。其逆も替度は此方の替徳。相手同士の詰開さく。加藤兵衛はつと
斗に氣も狂亂。いやさ命有ての詰開さ。死ぬ内先達されよと握ければ。遣手共口々に。其
身も父御のお出と聞き達度望み。只今是へと手負と寝屋の床乍ら。とろく身て出る体。父
の目もくれ走寄。横笛父成はと朱の血汐に抱付手足と擴げ身と撫て。疵も篤と見届け自
害の疵より棒の痕。死したる母が美しう産付たる肌と明所も無く打れし。自害せず共死
ぬべきに是と無念の自害かや。いつと叩殺されば。敵と取て腹いん物。可愛や早まつて思
ひと掛てくれるのと。人目も恥す聲と上伏沈みてぞ泣居たる。横笛父の手と取て。さ打叩
るゝの常の事。今死ぬる病人さへ酷い辛い親方なれば。我一人無念なと思ふでは無れ共。

流れと立て母様の遺言背く悲しさに。あらぬ歎と掛ますと父と見上見下して。泣聲も早息切して最期近くぞ見へにける。廣文が娘傍に寄て涙と押へ。おいとしや守我親の爲業ゆゑ此春よりの憂さ辛さ御身の上と思ひやり。自か代に残り御身様と戻さんと。是迄の参りしに敢ない死と遊そ。なふ父上たどへ此身が代ぬ逆。あのお方の最期と見て惜々とい返られまじ。家と出るより覺期ぞや。我とのばひ玉ふなと左も潔き詞の末。出かいたくど取て引寄せ。刺通さんとする所と母暫くと押止め。人の子殺して我子と助けふでい無けれ共世に療治も有ると。此子と殺して若わの子の疵本復有るならば。こちらの娘の誰が産で返そうぞ。なふ横笛様助のるも死ぬるも獨と思へど二人の命。氣と儘に持てたべ看病して給人々と悶焦れ泣けれ共。女郎遣手も哀さに。何處ぞでい此家に大きな事が。出けうくと思ふたと。袖と絞らぬ者の無し。今と最期の横笛。なふ父上必わの子と助てたべ。是のみ黄泉の障ぞや。私や來世で母様久しうて逢ふが嬉しい。南無阿彌陀の一聲も眠れること思絶たり。加藤の死骸に抱付前後不覺に取亂す。廣文娘と引寄せ既にうよと見へける所。加藤忙て抱取りいゝなく思ひもよらず。不便の娘が只今の遺言。父母の遺言より黙

止れず。此子と某申受け名と横笛と呼からい。我子が二度蘇生つたる同然。我子に指もさへせぬと。猶抱締て放さねば。夫婦あつと悦び涙。廣文何どの思ひけん胸押寛るげ抜いたる刀。腹にくつと突立て背骨にかけて引廻そ。人々は狂氣のと驚き騒げば。騒ぐまいくと押静め。ち加藤殿。我らも昔は弓矢打物取つて。誰に劣らぬ身なりしが。主君の諫言耳に逆ひ。勘氣と受けて此様。若かりし時忍び妻の腹に男子一人設けしと。商人の養子となし。其後此娘一人は持たれども年寄るに従ひ。世に力なく便なく。兄めと他人に興ずば弓馬の家と起し。老の樂み浪人の憂目は見まじいもの。惜や口惜や子程の實は無き物と我身の上は見ゆれども。人の上には盲目全然。洛中變化藝つて夜なく人と失ふ由。是幸いの粉しもの。思ひ染たる一念が地獄の道の門出なり。なふ加藤殿其子が素性も穢ならず。平家の大将常陸の介安盛が執權。八郎權の頭秀國とは我事よと。云ふ聲に。吉助覺へず廊下と飛で出なふ父上。我こそ商人の養子となりし。本名は右馬の允と継り付けば。寄るまいく。子ではない右馬の允と云ふ子は持ぬと。腕付られて聲と上げ子でないとは情なや。御無沙汰の不孝は御免あれ。何儀はりて申すべき。紅葉狩の此太刀と証據にて。親

と子よと只一言御詞と。頼み奉るとぞうを伏て泣きければ。太刀に倚りなければとて親子とは何事ぞ。五才より其年迄人と成りしは誰が養育。立冬素雪の寒き夜。九夏三伏の暑き日に老たる親と養ふより。子には心の碎るゝその憂苦勞と人に明け。まんまと育て上させ。誠の親よ實子よと親み寄り。養ひ親の心に満足せうか。何と嬉しむるべき。飛退れ子ではない。なふ加藤殿。逆もの事に此母も其子が乳母となしてたべ。是兩人。加藤殿へ忠孝勵み我と親と思ふなへ。一遍の念佛も親と思はば受まじさぞ。他人と思ひ回向せよ。一日の精進も養ひ親への無禮なり。涙一滴溢しなば七生までの恨なり。お暇申す加藤殿横笛殿さらばやと。刀と抜けば紅の。紅葉に於ける秋の霜消て果敢なく成にけり。女房娘右馬の允遺言重んじ泣ぬ顔。加藤兵衛所の者前代未聞の義士貞女。死骸共は跡より母横笛は先へ歸れと云ひければ。長大聲上げとこへ。横笛が代りにて名も横笛と呼からは。其儘此方の抱の内手形の通り勤ます。暇が欲くば五十貫に甘割増千貫積め。男共横笛と留め。親兄弟棒すくめにして追出せ。叩き出せと云ふ所に。俄に表懸しく見世も格子も打破る有り。坂田の公時真先に貞光季武綱保昌。山伏出立に込入て。上意くと金剛杖擲伏せく

誰か有る親子共にあれ縛れ。忝はると加藤兵衛吉助踏付く。縛付て引据る。渡邊の綱進み出。やい長承はれ。己が奉公人の抱へ様人買回然の仕方。其上折檻嚴く拷問とまなび。殊には歴々の町人さへ。愼む程なる奢身の程知らず世と憚らぬ我儘。其外敷ケ條の罪科疾く召捕るべき所。酒香童子退治に弓箭の御用。繁多の間宥免せられしなり。童子安々退治あり御歸浴の道より直に。我々仰せと蒙つたりと言渡す。公時隔り出。女郎せぶつて掴み取た一步小判の金がばら。覺へたあとこんとくらわす天窓の鉢。あたりも響く斗りなり。長頭と下げ一々誤り奉る。世上の人も聞き給へ奢る者久しならず。我人に要ければ人又我に要しと。口には言へと心に知らず。斯災難の來る時始めて悔むに甲斐もなし。重罪は一人あの世俸助け下されと涙に沈むぞ心地よき。兎角は都の御沙汰ぞと誓固嚴敷引立る。酒香童子茨木童子退治あるも世の誠め。政道輝やく頼光は朝參院參お振舞。京近國の悦びたる賑ひたるに酒樽に。太平の御代こそ目出度けれ。

傾城酒香童子終

明明明明
治治治治
廿廿廿廿
七七五五
年年年年
四四四四
月月月月
廿二十十
一十二一
日日日日
再再初初
版版版版
發行印印
行刷版刷

(戲曲叢書
第十二冊)

(定價金七錢)

所 版
有 權

發 印 發
行 者 者
元 者 者
全 全 發 印 發
全 全 發 印 發

早 松 丸 武 中
矢 本 善 藏 西
仕 本 善 屋 屋
民 本 善 屋 屋
治 本 善 屋 屋
本 本 善 屋 屋
町 本 善 屋 屋
五 本 善 屋 屋
番 本 善 屋 屋
地 本 善 屋 屋

肆 書 捌 賣
神 芝 京 京 神 神 神
田 南 橋 橋 田 田 田
區 南 彌 彌 裏 洽 南
表 佐 久 張 左 神 集 神
神 間 町 衛 門 町 保 館 保
保 町 町 町 町 內 町 町
中 栗 東 巖 上 黑 松
西 以 海 々 田 屋 江
屋 ら 堂 堂 店 支 雲 江
堂 堂 堂 店 堂 堂 堂
橫 大 神 神 神 本 本
坂 坂 田 田 田 鄉 鄉
北 北 一 錦 錦 四 區
久 久 々 町 町 丁 元
寶 寶 橋 三 一 富
寺 寺 通 丁 丁 士
町 町 目 目 目 町
丸 有 朝 武 文 盛
善 變 陽 藏 壽 春
書 書 閣 堂 屋 堂
店 店 店 店 店 堂
京 神 大 大 京 橫 京
都 戶 坂 坂 都 濱 都
都 戶 坂 坂 都 吉 都
大 久 吉 博 文 有 便
黑 榮 岡 文 林 隣 利
屋 堂 書 分 書 書 堂 堂

戲曲叢書
第五十一冊
八百屋お七三世二河白道合本
定價七錢
郵稅二錢

○發兌目錄

- 一 粵理は西本 音樂早學
- 一 歌曲は日洋
- 一 増補いろは引電信暗號
- 一 英文佛國民法
- 一 校訂活語指南
- 一 西洋女大學
- 一 簿記學原論
- 一 露國沿革史
- 一 櫻註徒然草讀本
- 一 堰堤築法新按
- 一 英和朱氏會話篇
- 一 獨乙語學獨案內
- 一 英和語學獨案內
- 一 英和單語がるた
- 一 實錄たどへがるた
- 一 類例
- 一 笑堂福集

發行所

五神田區宮本町
番地
叢書

書閣

梅田磯吉編	全一冊	定價	二十八錢
翻刻	全一冊	定價	七十六錢
里見義頭書	全二冊	定價	五十七錢
片岡信譯	全二冊	定價	六十五錢
竹田等譯	全一冊	定價	四十二錢
千葉文爾譯	全一冊	定價	三十二錢
高津柏樹標註	全二冊	定價	四十三錢
大島圭介譯	全一冊	定價	三十四錢
吉田信夫譯	全二冊	定價	四十五錢
アノノ氏原著	全一冊	定價	四十五錢
山本北山著	全一冊	定價	二十五錢
郵稅			二五錢

K-14

1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960

傾城酒吞童子

912.4

Ti238k8

国立国会図書館

088219-000-2

912.4-Ti238k8

傾城酒吞童子

近松 門左衛門/著

M27

DBI-0042

